シークレットサービス

はねふじ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
シークレットサービス

【Ｎコード】
Ｎ０１３６Ｗ

【作者名】
はねふじ

【あらすじ】
高津絵麻はどこにでもいる普通の女子高校生。ゆくゆくは国立大学に進学して公務員になって堅実な生活を送ることが夢！　と、日々地道に努力を続けている。しかしそんな彼女の願いとは裏腹に、現実は世界的大企業の御曹司と香港マフィアの跡継ぎ、二人の幼馴染の学校内限定の護衛をする毎日…。関わりたくないはずなのに、律儀な性格のおかげで自ら苦労を背負ってしまう主人公に、果たして穏やかな生活は訪れるのか！？

目立ちたくないそんな彼女の事情－１（前書き）

はじめまして。
作者の好きな展開を思いつくまま書き連ねていますが、楽しんでいただけると幸いです。

目立ちたくないそんな彼女の事情－1

キーンコーンカーンコーン。

６限目の授業を終えるチャイムが鳴る。
高津絵麻にとっては、今日一日が無事に終わったことを告げる合図だ。

通学時間４０分の都内私立高校に通う高校２年生。
一度も染めたことのない真っ黒の髪の毛は、きれいに肩で切りそろえられている。
靴下も紺のハイソックス、スカートも膝丈といたって健全だ。
部活には入っておらず塾にも通っていないため、いつもすぐに帰宅している。
まだ２年生だが、最近は受験を意識して大学受験に向けての勉強も始めた。

こうして特別に何もなく、穏やかに毎日を過ごすことに不満はない。
むしろ、永遠にこんな日が続けばいいと思う。
毎日儀式のように必ず心の中で繰り返しながら、教科書をかばんに詰めて帰り支度を進める。
ダラダラと教室に残っていると先生から雑用を頼まれたりするかもしれないし、それ以上にやっかいなことに巻き込まれるかもしれないからだ。
周りを見ると、クラスメイトたちも放課後モードに入っていた。
部活へ行く生徒やこれからどこに遊びに行こうか相談している生徒

がいる。
その中でも、見た目からしても今ドキの高校生らしい男女のグループが、ひときわ盛り上がっていた。

「ゲーセン行こうよー」
「えーあたしはカラオケ行きたーい。新曲入ったから練習したいしい」
「野宮くんはどうするー？」
「んー俺？」

野宮と呼ばれたその男子生徒は、明るめの茶髪に大きなリングのピアスをした派手な女子生徒に声をかけられて振り向いた。
少し長めの髪は淡い蜂蜜色で、目も日本人にしては薄い茶色をしている。
そんな彼の机の回りにはいつも人（特に派手目な女子）が集まっていた。
今日も例外でなく放課後デートのお誘いが盛んに行われていた。

「ごめん、すっごく行きたいんだけどさー、今日はちょっと用事があるんだよね。家のことだからどうしても抜けられなくってさ」
「おうちのことって、お父さんの会社の用事とか？」
「そうそう、将来のために今から勉強しろってうるさいんだよ」
「でもでもぉー純がいないとつまんないよー」
ひと際派手な化粧をした女子生徒が、甘えるような声で純の机に両肘をついて上目づかいで見つめる。
「ホントにごめんね？今度は絶対に行くよ。君たちみたいなかわいい子からのお願いを断るなんて、二度は出来ないからね」

小首を傾げながら蕩けるような甘い笑顔を向けると、派手目な女子生徒はそれに一瞬見惚れた後、「う、うんわかった」と勢いよく頷くいて机から離れた。
他の女子たちも、そういうことなら仕方がない…と彼の周りから名残惜しそうにして離れていく。
今度は絶対に来てねと一言は忘れずに。
そんなクラスメイトのやり取りを横目に見ながら、絵麻は、自分には縁のない会話だなぁとぼんやり思いながらそっと教室を出て行った。

＞＞

「エマ」

教室を出て下駄箱に向かう途中で、呼び止められた。
後ろから声をかけられてもすぐに誰だか分かる。
ここで彼女を「エマ」となれなれしく呼ぶのは限られた人間しかいない。
絵麻は、舌打ちしたいところを抑えて立ち止まった。

振り向くと、そこには先ほど教室で女子に囲まれていた野宮純が立っていた。
が、絵麻は返事もせず、前に向き直ってそのまま昇降口まで進む。

「エマってば」
「…」
「ねえ、エマ」
「……ちょっと。前に言ったこと、忘れた？」

無視する絵麻の後をずっとつけてくる純に苛立ち、絵麻は仕方なく立ち止まった。
そして他の生徒に聞かれないよう小声で言う。

「学校では気安く声をかけないでって言ってるでしょう」
「忘れてないよ？だから仲良く見えないようにしてるじゃん」
「せめて学校出てからにしてよ」
「え、じゃあ外だったらベタベタしてもいいんだ？」
「…今、ここで殴り飛ばされたいの？」
絵麻は睨みつけてみたものの、純はまったくこたえる様子はない。

「エマはそんなことしないよ。…というか出来ないでしょ」
純はニヤっと笑う。普通の人だったら嫌味ったらしいのに、彼だと憎めないのがより一層癪に障る。

「みんなの前で殴ったりしたら、バレちゃうもんね？　お・う・ち・の・コ・ト」

その言葉に絵麻は眉を顰めた。そう言えば絵麻が決して断らないと踏んだ上での発言だ。
純は、クラスでは男女共に人当たりがよく、常に明るく振る舞っているが、絵麻の前ではいつも腹黒い本性しか現わさない。

「話、聞けばいいんでしょう。で、今回は何？」
「そうこなくっちゃ」

純は満面の笑みを浮かべて一歩絵麻に近づく。
周りに話を聞かれるのも困るが、近くに寄られて何か関係があると思われるのも困る。
純は絵麻の顔を覗き込むように少し屈みこみ、蜂蜜色に光るやわらかい髪を揺らめかせながら首を傾けた。

「俺さー明日親父の会社寄らなきゃいけないんだよね」
「へー」
「挨拶まわりとかしなきゃいけないし」
「ふーん」
「でも危ないから一人じゃ回れなくってさ」
「あーそう」
「あーそう、じゃないよ他人事みたいにして。絵麻も行くんだから」
「いやよ」

絵麻は小さい声ながらもはっきりとした声音告げた。
そんな反応にも動揺せず、純は笑み崩さずに言葉を続ける。

「そっかーじゃあ俺の気持ちが通じるまで、明日から教室でも帰り道でもずっと絵麻の見続けようかなぁ。
そしたらきっと、周りも俺の気持ちに気づいてくれて、絵麻の気が変わるよう協力してくれるかもしれないしね？」

…なぜこの男はいつも脅して人に言うことを聞かそうとするのだろうか。
そんなことをしたら、上級生から下級生までのあらゆる女子たちに攻撃されてしまう。
力でねじ伏せられるのは癪に障るが、本当に実行されればその場で絵麻の学園生活が終了してしまうので、どちらにしろ絵麻は折れるしかないのだが。

「…分かったわよ。明日行けばいいんでしょ」
「Ｇｒａｚｉｅ！じゃあ明日の放課後、裏門で待ってるから」

思い通りに約束を取り付けられて満足したのか、純はあっさりとその場を去って行った。
一方、絵麻は明日一日が無事に終わらないことを確信して、深くため息をついた。

＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞

＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞

「絵麻」

裏門へ向かう途中の廊下で、絵麻はその声を聞くなりまた舌打ちしたくなった。

連続で声をかけられるなんて、今日は本当についてない。人気のない廊下だからまだよかったものの、念のため周りに他の生徒がいないことを確認して、絵麻は振り返った。

そこには、純と同様に見慣れた姿があった。

身長１８０ｃｍ以上はある恵まれた体の上にのった端正な顔と、鋭い目を隠すようなシルバーフレームの眼鏡。

髪はきれいな黒髪だが、耳にはシルバーのピアスがいくつもキラキラと光っている。

一見もの静かに見える容姿だが、その大きな体格と醸し出す威圧的な雰囲気に、大体の生徒は物怖じしてしまうだろう。

男子生徒は眼鏡の位置を直しながら絵麻に近づいていくと、絵麻は不機嫌極まりないと言わんばかりのしかめっ面でそっけなく答えた。

「今度は何？まさかあんたまで会社について来いって言うんじゃないでしょうね」

「会社？…ああ、純のやつか。最近親父さんの仕事を手伝わされているみたいだな。パーティーにも頻繁に顔を出してきているらしいから、そろそろ正式に後継者として発表されるんじゃないのか」

先程、絵麻の平穏な明日をぶち壊した純の父親は、一代で会社を興した大手貿易会社の社長である。
イタリアでアパレル事業で成功を収めてから、数年後に妻の母国である日本を拠点にしてさらに発展してきたグローバル企業だ。
その一人息子である純は幼少の頃から会社を継ぐことを求められてきたが、中学生頃までは反発してかなり遊びまわっていたらしい。
高校生になって腹を決めたのか、父親の事業に自ら加わるようになった。
彼の”最近忙しい”という発言は、ただのクラスメイトの誘いを断るだけの口実ではなかったようだ。

「ふうん、そうなんだ。でも琥狼だってやっぱり家業を継ぐんでしょ？純のことも人事じゃなくなるんじゃない？」
琥狼と呼ばれたその生徒は、絵麻のその言葉に片眉を上げた。

「俺はもうとっくにお披露目されているからな。中途半端な覚悟だと命がないからこっちも必死だ」

玖狼――――　鷹村玖狼は、香港一のマフィア一家の長男である。
父親が日本人だったことと、香港で毎回のように誘拐されかけていたため、１０歳の時に日本に移り住んできた。
本名は楊玖狼だが、日本では父親の姓である鷹村を名乗っている。
すでに幼少の頃から自他ともに家業を継ぐことに異論はなかったが、一部反体勢力がまだ残っているらしく、完全に継ぐまではもう少し時間がかかるようだ。

「毎回言っているけど、私が頼まれてるのは“学校内”限定なの。校門から外、学校の敷地以外のところでは一切関与しないわよ」
「お前のそのきっちりしているところはいいんだがな、もう少し融通利かせて幼馴染を助けてくれてもいいだろう」
「何言ってんの。そんなことやってたら、ただでさえ穏やかでない学校生活がますます送れなくなるじゃない」
そんな絵麻の主張に、琥狼は呆れた顔で言った。
「そっちこそ今更何を言っているんだ。…普通の女子高生はバイトだとしてもポディーガードなんかやらないぜ」
「ちょっとそれ言わないで！」
「本当のことだろうが」

そう———絵麻は、バイトとして野宮純と鷹村琥狼のポディーガードをしている。
その言葉通り、彼らを狙う輩を撃退する身辺警護というものだ。ただし、学校内限定という約束付きで。

普段運動オンチを装っているが、実は絵麻の身体能力はかなり高い。それに加え、幼少からの空手や合気道といった様々な武術を習得させられたおかげで、成人男性何人がかりでも難なく撃退することが出来る。
それを活かした上で選んだバイトなのだが、絵麻はポディーガードという自分のバイトのことを学校の誰にも話してはいない。
親しい友人さえ、彼ら二人と親しいことに気付いたことはないだろう。
ポディーガードがついていることを周囲に悟らせないようにしてい

ることもあるが、何よりも絵麻自身が目立つことを嫌っているからだ。
学校内限定だとしても、彼ら二人の側にいれば嫌でも目立ってしまう。
同じクラスで見守るだけならともかく、この二人と仲がいいと思われるのは本当に困るのだ。
純はあの某アイドルのような華やかな容姿と人懐っこい性格から女子の人気が半端ではないし、琥狼は琥狼で、インテリ眼鏡を装いながらもその恵まれた体格と実家の家業からか男子生徒の兄貴的な存在となっている。
学校のアイドルと裏番長、この二人と関わりがあると周りに知れたら、嫉妬やら誤解やらで何をされるか分からない。
特に、先程純をしきりに遊びに誘っていた今どきの女子たちを敵に回したら、一体どうなることやら。

「とにかく、学校外のことはプロのボディーガードに頼んで。私、家に帰って勉強したいの」

これ以上、琥狼と話しているところを誰かに見られるのは避けたい。早くこの会話を打ち切りたくて、絵麻は無理やり話を終わらそうとする。
そんな絵麻の様子を見て、琥狼は首をすくめて軽くため息をついた。

「仕方ない。じゃあ今回は諦めて、うちの人間にやらせるか。あいつらだとちょっと心許ないんだがな」
そう言って眼鏡の端を上げると、琥狼は踵を返して去って行った。

「・・・次回もないわよ」

琥狼の後姿を見送りながらつぶやくと、絵麻は今度こそ下駄箱へと向かった。

目立ちたくないそんな彼女の事情－2

絵麻が純と琥狼のボディーガードを請け負っているのには色々とワケがある。
――簡潔に言うと、学費を稼ぐためだ。

両親が仕事で海外出張に出かけたまま行方不明になったのが、絵麻が１２歳の時。
突然４つ下の弟と二人取り残され途方に暮れていたところ、父親の年の離れた弟である浩司に引き取られた。
その時まだ２０代後半だった叔父の世話になるのも申し訳ないと思い、せめて学校費用は自分で稼ごうとバイトを始めようとした。が、当然ながら１２歳の子どもを雇うところなどなく、叔父に相談したところ、このボディーガードの仕事を勧められたのである。

浩司はまだ３０を少し過ぎた年齢だが、短期間でこの業界で評判になるほどのすご腕経営者だ。
以前は警察関係の仕事をしていたが、絵麻の両親である兄夫婦が行方不明になる少し前にこの会社を立ち上げて、その後絵麻とその弟の面倒をみてくれてきた。
もちろん、浩司は何度も一緒に暮らして生活費や学校費用もすべて負担すると言ったが、絵麻は断固として断った。
これ以上、叔父に迷惑をかけたくない思いからだったのだが、最後に断ってからというものの、日に日に絵麻の能力よりも難易度が高い依頼を寄越すようになった。
弟は、「わざとキツイ仕事をふって、姉さんが根を上げて助けを求

めてくるのを待ってるんだよ」と笑いながら言うが、絵麻にはただのイビリにしか見えない。
きっと、あの幼馴染二人の護衛を勝手に引き受けたのも、これなら絵麻が限界とすがってくるのを見込んでのことなのだろう。

「確かに、あの二人の護衛は普通より報酬いいんだけどねぇ…精神的に疲れるっていうか」

学校生活という絵麻のプライベートにさえ関わらなければ、こんなに憂鬱になることもないのだが。
気心は知れているが、関わりすぎない方がいい——これは、中学・高校と一緒に過ごしてきたからこそ分かることだ。
これから叔父のところへいくついでに、あの二人のイレギュラーな仕事は入れないようにお願いしようと思った。

＞＞

絵麻は帰り道の途中、学校と家の間とのある駅で降りた。
今日は週に一度の叔父の会社に寄って行かなければならない日だ。
駅から降りて住宅街に向かって少し歩いたところにある雑居ビルに入る。
ビル７階の年季の入った鉄のドアを開けると、そこには机の上の両足を置いて煙草をくわえながら迎える男がいた。

「よお、絵麻。今日は少し遅かったな」

絵麻の叔父であり、シークレットサービス会社“夜刀”の社長でもある高津浩司だ。
絵麻が部屋に入ると、浩司は長めの少しパーマがかった髪をかき上げて両足を机から下ろした。

「ちょっと学校でやっかいなのに捕まってたの。今日はお給料日なんだもの、それがなかったらすぐに来てたわよ」
「なんだそれ。…ああ、いつものあいつらか？お前も相変わらずモテモテだなぁ」

浩司はニヤニヤしながら煙草の煙を吐く。
黙っていれば、ちょっと体格のいいナンバーワンホストと言っても通じるのに、人をすぐにからかうところが絵麻にとっては残念なところだ。

「モテモテとかそういうわけじゃないってよく分かってるでしょ。…いつもの護衛の依頼よ、時間外のね」
「そういや昨日こっちに依頼があったな。純坊の親父さんの会社のパーティーだろ？確か、明日の１９時から始まるとか言ってたような…」
「ちょっと！知ってたんなら何ですぐに教えてくれないのよ！」

絵麻は浩司の言葉を遮って掴みかかったが、すぐに両手首を掴まれ

て身動きが取れなくなる。
叔父は煙草をくわえたまま、余裕の表情だ。

「まあまあ細かいことは気にするなって。どうせお前、放課後何も予定なんて入れてないだろうが。この仕事は臨機応変に顧客の要望に対応してなんぼのもんだ。純坊は大口顧客なんだから、もっと愛想良くしろよ」
「って、私が好きであの二人の護衛してるんじゃないし！元はと言えば、浩司おじさんがこの仕事押し付けてきたんじゃない！」
「おじさんって呼ぶな。ここでは社長だろ」
「…横暴社長！サド社長！」
「俺の人選に文句あるなら、代役でも探すんだな。まあ、お前みたいな条件の人材なんてそうそう見つからないだろうが」

“夜刀”は、社員２～３０人程で会社としては規模が小さいが、一人ひとりの能力が非常に高く、その質を買われて各国の財界や政界などのトップの護衛を請け負っていることが多い。
その護衛内容には囮や調査など、ただ守るだけではないものも含まれているため、社員は個々の専門分野を持つ者を雇っていた。
浩司は、社長であると同時に営業も兼ねており、もう一人の担当者と共に数多くの依頼を各社員に割り当てている。
依頼内容と社員の適性を吟味した上でのことなのだが、依頼内容には“２０代の白人男性”や“大柄な若い女性”など見た目に対する要望も含まれている。
社内外で希望に沿う容貌の者を探したり、時には変装をして任務に当たるのだが、業界柄若い女性が少ないため絵馬のような少女は重宝されていた。
同時に、要員が少ないため依頼が集中してしまい、特に女性が少な

いこの会社では絵麻はひっぱりダコだ。
幼馴染二人の時のように、また浩司から「他に適任がいないし、ムサイ男共に女装させる気か」と何故か逆ギレされるのは何とも割に合わない。

「……どうせ口で言ってもおじさんには敵わないからやめとく。」
「お利口さんだな。さすが俺の姪っ子だ。あと、社長な」
「そのかわり、急な依頼を受けるのはやめてよね。勉強時間減るから」
「でも自分で学費稼ぐって言ったのはお前だろ？だから、あえて依頼を多く受けてやっているのにな……そろそろ、俺を頼る気になったか？」
「それはいい」

浩司は絵麻の頭をぐりぐりと撫でまわしていたが、絵麻はその手を叩き落とした。
何をやっても叔父の手の上で転がされてしまうのは、この仕事を始めた時からよく分かっている。

絵麻の初仕事は１０歳の時だった。
依頼でどうしても東洋の少女が必要なことがあり、浩司が当時絵麻が欲しがっていたゲームを餌に、実業家の護衛につかせたのである。
それは記念パーティーで実業家の娘の代理として出席することだったが、事前にパーティー中止の脅迫状が届いており、当日会場で何かが起こると懸念されていた。
案の定、実業家に暴漢が襲いかかったが、絵麻の見事な一本背負いで即時に解決した。
それから絵麻の噂を聞きつけて依頼する者が多くなり、代理出席や

ら囮やら潜入調査やらやたらと仕事を回されるようになった。
海外での仕事が多く、さすがに学校を欠席することが多くなったため、高校進学をきっかけに絵麻は叔父へ直談判しに行ったのだが……その交換条件として、幼馴染二人の学校内での護衛を出されて、現在に至る。

幼馴染二人は、親の仕事柄、幼い頃からあらゆる場面で危険が多く、常に3人以上のボディーガードがついていた。
しかし、学生の間はある程度普通の生活を送りたいと二人が主張しだすと、絶対にボディーガードは外さないという親の意見と対立。色々ともめた末、折衷案として二人の希望通り高校では屈強なボディーガードは張り付かせないが、ばれないようなボディーガードはつけることとなった。
そのボディーガードとして抜擢されたのが、絵麻であった。
絵麻は猛烈に反対したが、周りの説得と叔父の根回しや外部権力に負け、泣く泣く仕事を引き受けることとなったのである。
すでに絵麻にかなりの実績があったこと、見た目はただの地味な少女に見えること、そして問題児の純と琥狼の扱いを心得ていることから、適任と見なされたのである。
彼らはそれで満足かもしれないが、絵麻の穏やかな学校生活は霧散に消えた。
せめてもの最低条件として、「護衛をするのは学校敷地内だけ」「クラスを同じするのは仕方ないが、絶対に仲良くしないこと」「中学までの知り合いが一切いない高校に入学すること」を確約させた。こうして事件もなくクラスメイトにも気づかれることなく、これまで1年半を乗り切った。
あと1年半経てば高校生活も終わり、契約を満了――――穏やかな生活が戻るのである。
彼らは家業を継ぐべくそれぞれの道を行くのだろうが、絵麻は国立大学に行って手堅い仕事について堅実な人生を歩むつもりだ。

それまでの間だけ我慢すればいい。
幸い、これまで誘拐や襲撃などの事件は起こっていない。
あと残りの期間も無事に終わることを祈るだけだ。

「今回の純の仕事は受けるから。そういえば他にも今週の依頼ってあったよね？」
「ああ…今週の金曜だな。学校帰りに車で拾ってくから、裏門で待ってろ」
「わかった」
「あとこれ」

浩司は机に戻って引き出しから封筒を取り出すと、それを絵麻に手渡した。
先週の依頼分の給料だ。

「たまには夏音にもいいもの食わせてやれよ」
「失礼ね、そんなにケチな生活してないわよ！うちの弟は誰かさんと違っていい子ですからね」
「お前と比べてか？」
「はいはい、じゃあ金曜ちゃんと迎えにきてよね！」

絵麻は浩司にべーっと舌を出して、そのまま勢いよく踵を返して出て行った。
ドアを閉めても浩司の笑い声が廊下に響いていて、絵麻はいつか絶対にこの叔父を言い負かしてやろうと心に誓った。

目立ちたくないそんな彼女の事情ー3

翌日の放課後。
純と待ち合わせを約束した裏門へ着くと、そこには黒塗りの高級車が止まっていた。
絵麻が近づくと自動でドアが開いたので、周囲を確認しつつ後部座席に乗り込む。

「よかった。もしかして来ないのかと思った」

すでに後部座席に乗り込んでいた純が、にっこりと笑いかけてきた。
絶対に逃げられない弱みを握っておきながら、何て白々しい態度を取るんだ、と絵麻は心の中で毒づく。

「で？今回無理やり付き合わされる仕事の内容は、一体何なの？もちろん、時間外手当もらえるんでしょうね。いつもの3倍は」
「うわ、トゲのある言い方だなーさすがの俺も傷ついちゃうんだけど」

しなを作ってわざとらしい傷ついた顔をする純に、絵麻は白い目を向けた。
が、いつものごとく純はそれを受け流す。

「安心してよ、ちゃんと報酬は弾むからさ。しかも今回は簡単なお仕事だからさ」
「…簡単？」

「そう！いつもよりかわいく着飾って、２・３時間ニコニコしながら人とおしゃべりしてるだけでいいんだよ」
「……何かそれ、アヤシイ仕事に聞こえるんだけど」
「大丈夫大丈夫！初めてでも俺が一から教えてあげるから」
「……」

絵麻は軽蔑も含んだ白い目で、さらに純を睨んでギリギリまで距離を話した。
純も笑顔を崩さない。

「と、いう冗談はさておき…そろそろ仕事の内容に入ろうか」

急に純の雰囲気が変わる。
表情はそのままだが目に鋭さが宿ったのを見て、絵麻も気持ちを引き締めた。
いつもはただのナンパ男だが、ビジネスの話になると経営者の顔に切り替わる。
さすがは、幼いころから会社を継ぐべく英才教育を施されていただけのことはある。
普段もこれくらい真面目であれば絵麻の評価も変わるのだが。

「今日は、うちの支店の新作披露パーティーがあるんだ。そこで俺の護衛をしてほしい」
「何か狙われる心当たりでもあるわけ？」
「そりゃあいっぱいあるさ。でも、今回は事前に脅迫状がきてたんだよね…どうしてもパーティーを邪魔したいみたいだ」
純は鋭い目線を前に投げかけたまま、口端を少し上げた。

高校に入ってから、純は父親の会社の後を継ぐために経営に関わるようになった。
多くの支持を得たうえだったが、やはりどこにでも反対勢力というものはあって、いまだに決着がついていないらしい。
しかも相手も巧妙に妨害をしてくるので、なかなか黒幕が叩けない。
少しでも尻尾がつかめれば一気に追い込める準備は出来ているのになと、純はため息をつきながら呟いた。

「そっか、おぼっちゃまも大変だわね……分かった、今回の報酬は3倍じゃなくて2割増でいいわよ」
「…それ、せめて割増なしになんない？」
「そういう甘いことしてたら、こっちも商売にならないの。本当はいつもの報酬じゃあ足りないくらいなんだから」

そんな絵麻のそっけない言葉に、純は先ほどまでのビジネスモードから切り替わって、口を尖らせて文句を言う。

「いつからそんなにシビアになったんだか。昔はおもちゃの指輪をあげても喜んだりして、かわいげがあったのにさ」

純は、首から下げているシルバーのチェーンをつまみ上げて絵麻に見せる。
普段はシャツに隠れて見えないが、そこには小さな銀の指輪がぶら下がっていた。

「これ…あの時の指輪？」
「そう、ガキの時に俺たち三人おそろいで買ったあの指輪だよ」
「え、こんなちっちゃかったっけ？」

「よく見てみなよ。子供用だからこんなもんだって」

純はネックレスを外して絵麻に渡した。
絵麻は、そのネックレスの先端にある小さな輪っかを手に取ってしげしげと眺める。

「純、こんな風にして持ってたんだ…」

昔、日本のお祭りに行ったことがないという純と琥狼を、絵麻は近所の縁日に連れて行ってあげたことがある。
はしゃいで屋台を回っていると、おもちゃの指輪を売っている店の側を通りがかった。
先端の石がキラキラ光るそれをじっと見つめる絵馬に、二人が持っている小銭を合わせて買ってくれた。
そして、純の提案で三人色違いでお揃いにしたのだ。
あのぶっきらぼうな琥狼も、文句も言わず純の提案にのっていた。
友達が少なかったこともあり、同じものを持つことがまるで友情の証のように思えて嬉しかった記憶がある。
今は指にはまらなくなったので、純はネックレスに、琥狼はピアスにして持っているようだ。
ちなみに、絵麻の指輪は段ボールに入れたところまでは覚えているが、本当にそこにあるかどうかは定かではない。
何か後ろめたいものを感じ、絵麻は目線を合わさずネックレスを純に返した。

「でもさ、護衛だったら私が着飾る必要なんてないんじゃない？秘書とか通訳とか、側に控えていてもおかしくない立場の人にすればいいんだから」

「それじゃあつまんないじゃん」
「誰が」
「俺が」

ボコッ。

絵麻は思わず純を殴った。
面白い面白くないの話で、人に迷惑をかけるなんて言語道断だ。
普通の女の子はきれいにドレスアップすると喜ぶものだが、慎ましく地味に目立たなく人様に迷惑をかけないよう生きることがモットーの絵麻には面倒くさい以外の何物でもない。
一応、有名人なので顔は避けて肩にしてやったが、殴った衝撃で純は窓ガラスに頭をぶつけていた。
「いたっ！これ以上頭打ったら俺バカになるじゃん」と純は涙目に文句を言うが、絵麻としては毎回人をおちょくるのに無駄に頭を使うこと自体すでにバカだと思う。

そんな二人のやり取りに、今まで全くもって口を挟まなかった運転手が控えめに目的地の到着を告げた。
絵麻が窓の外を見ると、そこは都内の有名なショッピングモールだった。
どうやら、ブランド店が立ち並ぶ通りに面した立地のいい場所が、今回のパーティー会場のようだ。
車を店の前の止めると、すぐにドアマンが後部座席を開けに近寄ってきた。

「さあて、行きますか」

「……仕方ないわね」

どこか楽しげな純を横目に、絵麻はため息をつきながら車を降りた。

目立ちたくないそんな彼女の事情ー４

絵麻と純は、会場に向かう前に控室で服を着替えた。
さすがにどちらも制服のままパーティーに参加するわけにはいかない。
絵麻は、本人の希望通りに地味なメガネの秘書に化けていた。
グレーの上下のスーツに、髪の毛は後ろでひとくくりにしただけ、あとは決しておしゃれではない黒縁のメガネ。
さっきチラリと見た会場の中には、モデルのようなスタイルのいい美人や、高いブランド服を着こなすセレブばかりだったので、これなら壁と一体化して目立たなく出来るだろう。
絵麻が満足して鏡を眺めていると、ノックする音がしてすぐにドアが開いた。

「エマ、準備できた？…って」

絵麻のあまりの野暮ったい服装を見て、純は口を尖らした。

「ええ～何でそんな地味な格好なの？うちの会社の秘書なんだから、もっとセクシーな服にしてよ」
「何言ってんの。護衛目的なんだから、目立っちゃダメでしょうが」

絵麻は両手を腰にあてて、呆れた声で言った。
というか、女性が着替えをしている部屋に断りもなく入るとは何事だ。

しかもセクシーな秘書がいいとは、どこまでこいつは色ボケしているんだろう。
絵麻が軽く睨んでいると、純がスタスタと近寄ってきて、改めて絵麻を頭からつま先までを眺めた。
純の服装を見ると、ブラウンのジャケットにネイビーのスラックスを合わせて、いつもは流したままにしている長めの髪を後ろになでつけてきれいに整えていた。
ジャケットと左右に流した蜂蜜色した髪とがよく合っていて、見た目はちゃんと良家のおぼっちゃんに仕上がっている。
純はしばらく右手を顎に当て絵麻を見つめていたが、ふいに両手で絵麻の白いブラウスのボタンを上から外し始めた。

「……ちょっと、何してんの」
「何って、こっちの方がセクシーに見えない？」
「別にセクシーに見える必要ないんだけど」
「こう、胸の谷間がちらっと見えるのがいいんだよねぇ」

純は手慣れた様子で、ブラウスの第二ボタンをまでを外していく。
絵麻はあまりの暴挙に呆気にとられていたが、なけなしの胸の谷間が見える第三ボタンが外される寸前で我に返り、純の手をぴしゃりと叩き落とした。

「いてっ！」
「バカなことやってんじゃないの、必要ないって言ったでしょ！」
「じゃあ、こっちならいい？」

と、今度は、膝小僧が半分隠れているスカートをたくし上げてきて、絵麻の太ももを半分以上露わにする。
普通の女子ならここで悲鳴をあげるところだが、絵麻は持ち前の反射神経で純の腹に膝蹴りをお見舞いしてやった。
さっきは呆気にとられてとっさに手が出なかったが、二度も三度も許すつもりはない。
ちょうど膝蹴りが決まった瞬間、ドアをノックする音が響き、秘書がドア越しに会場入りの時間を告げた。

「時間だって。ほら、いつまでもうずくまってないで行くわよ」
「…雇い主に膝蹴りって、普通なくない？」
「自業自得。同情の余地なし」

まだ腹を両手で押さえる純を睨みつけ、絵麻は颯爽と部屋をあとにした。

＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞
＞＞＞＞＞＞＞＞

煌びやかな会場に足を踏み入れた瞬間、そこにいる来賓の視線が一斉に純に集まった。
単純に好奇心によるもの、または未来の社長にふさわしいか値踏みするもの、わずかな嫉妬が見え隠れするもの。そこには、純を歓迎するものだけでなく、人の醜い感情も潜んでいた。

純はそれらすべてを平然と受け止め、会場を見回して笑顔で挨拶をした。

「本日は我が社の新作披露パーティーにお越しくださり、誠にありがとうございます。まだまだ若輩者ではございますが、父に代わりましてわたくし野宮純が、本日皆様をおもてなしさせていただきます。短い間ではございますが、どうぞお楽しみください」

多くの来賓の前で堂々と挨拶をこなす純に、人々は称賛の拍手を送っていた。

絵麻は、純が挨拶をしている間にさりげなく会場が見渡せる位置へと移動していた。

この後は新作のファッションショーと1時間ほどのフリータイム続く予定なので、その間はずっと純を遠目で追いながら護衛をすることになる。

絵麻は、事前に頭に叩き込んだ見取り図と実際の会場の造りを照合しながら、この後の護衛の内容を頭の中で確認する。

人目に入りにくい部屋の隅で、ひと通りやるべきことを終えて壇上を見ると、純はまだ話を続けていていた。

絵麻は堂々とした純を眺めながら、ふと昔の姿と重ねた。

（昔から人当たりはよかったもんね…おばあちゃんから幼児まで誰とでも好かれるタイプっているんだなって、よく感心したもんだわ）

絵麻が純と出会ったのは、小学6年生の時だ。

無理やり浩司に付き合わされて、何かのパーティーに行ったことが

ある。
その時、会場には純も父親に同伴して訪れていた。
後から聞くと、すでにその頃から後継者としてよくパーティーに顔を出していたらしいのだが、たくさんの大人たちに囲まれて純は慣れた様子でそつなく言葉を交わしていた。
そんな純をぼんやり遠目に見ていたのだが、絵麻はその笑顔に何か引っかかるものを感じた。
元々きれいな顔立ちをしているのに加え、誰に対しても完璧な笑顔なのに、何か不自然なものを感じて仕方なかったのだ。
絵麻が首を傾げながら純をじっと見ていると、それに気が付いたのか、純は父親と一緒に、絵麻たちのところにも挨拶にきた。
そして、浩司の“俺の姪っ子の絵麻だ。お前と同い年だから仲良くできるんじゃないか”という紹介を受けて、笑顔で手を差し伸べる純に、思わず言ってしまったのだ。
“どうして笑っているの？”と。
一瞬だけ純は動きを止めたものの、何も言わずに笑顔のまま握手を続けた。
側にいた純の父親は軽く目を見開き、浩司はニヤリと笑っていたが何も言わなかった。
その後、何故か顔を合わす機会が多くなり、何故か純にキツく当たられるようになり、そして仲良くなるまで色々あったのだが、今では絵麻の前での純は、表情も口調も何も着飾ったところはない。
作り笑いをする時は、何か後ろめたいことがあるか悪巧みを企んでいるときだけだ。
（……今回も何か企んでそうな笑顔だったしなぁ。本当は関わりたくないんだけど）
壇上での純の挨拶が終わり、彼は来賓ひとりひとりに挨拶に向かっ

ていた。
側には本当の秘書が付いているのみで、あとは通常の警備スタッフが離れたところに数名控えているだけだ。
絵麻は気配を殺して、来賓の様子をうかがうが、ざっと見た感じでは不穏な動きをする人間はいない。
おそらく元々の警備がしっかりしており、スタッフも優秀なのだろう。
限られた人間を招き入れ、会場の入り口を絞り、人や物の出入りを完全に把握できるような造りにしている。

（なんだ、これなら特に心配する必要はなさそうね…わざわざ時間外で依頼するくらいだから、よほど手数な警備状況かと思ったのに）

絵麻は思ったより厳重な警備に少しほっとする。
が、こういう仕事に油断は大敵だ。
純は相変わらず順調に挨拶まわりをしているが、最後まで何が起こるかは分からない。
報酬をもらう分は働かないと…という元々の律儀な性格も相まって、絵麻は気を引き締めて周囲に目を光らせた。

目立ちたくないそんな彼女の事情－５

「何事もなくてよかったわね」

パーティーも無事に終わった帰りの車の中で、絵麻はつぶやいた。
純は先ほどまでのお坊ちゃんモードを解いて、年相応の高校生に見える私服で後部座席のシートに沈んでいる。
絵麻も地味なスーツを脱いで、制服姿に戻っていた。
外部での護衛の時はたいてい変装するが、いつもの格好がやはり落ち着く。

「そうだね、順調に進みすぎて怖いくらいのパーティーだったかも」
「しっかりとした警備だったし、別に私付いてなくてもよかったんじゃない？というか、あんたのとこと契約しているボディーガード、すごく優秀みたいだから、学校内でもやってもらえばいいと思うけど」
「何言ってんの。せっかくの学校でもムサい男共に囲まれてるなんて耐えられないって。エマみたいに１０代でボディーガード出来る女の子ってなかなかいないんだよ？」

それはそうだろう。
そんなにボディーガードが出来る女の子がいっぱいいたら、絵麻に仕事が回ってくるわけがない。
私だって好きでやってるわけじゃないんだと思いながら、窓の外に目を向ける。
都心から離れた絵麻の家まで向かう、見慣れた高速道路からの景色だ。

時間外の護衛の場合は夜が遅くなるので、帰りは車で家まで送ってもらうことにしている。
窓の外を見ながらため息をつく絵麻を見て、純も大げさにため息をつく。

「なんでそんなに嫌がるかなぁ？これでもすごく褒めてるんだけど」
「まあ…能力を買ってくれてるのはいいけど、私は穏やかな生活が一番大事なの。それにそのうち大学受験もあるし、就職もしなくちゃいけないし、ずっとこの仕事しているわけにはいかないじゃない」
「就職ならこのままボディーガードやればいいじゃん。エマは浩司さんとこの秘蔵っ子なんだし、政財界や芸能界のＶＩＰから指名もすごいんでしょ？それが嫌なら……」

純は、身を乗り出して左側に座る絵麻に近付き、耳元に口を寄せる。

「俺の専属になればいいよ。そしたら一生困らないようにしてあげる」

絵麻は急な純の接近に思わず窓側に体を引いた。
いつもより純の声のトーンが低い。
軽い調子は消してささやくように、だが確かに耳の奥まで届くほどしっかりと告げる。
だいたいこれで女性は頬を染めて、純に夢中になる。
これ以上逃げ場がない絵麻を見て悪戯心が湧いた純は、耳たぶを噛んでやろうと、さらに顔を近づけた。
が。

「いてっ！」
「バカなこと言ってんじゃないの。あんたは昔から、すぐにそうやって誰構わずスカウトするんだから。しかも一生って、そもそも私この仕事やってくつもりないし。普通の会社で普通に働きたいの」
「…なんで毎回そんなに頑ななのかな。すごくいい条件だと思うのに」

絵麻に叩かれた額をさすりながら、純は体を引いて元いた位置に戻った。
専属の話は、純だけでなく琥狼にもよく言われることだ。
確かに、絵麻はボディーガードの経歴が長いにも関わらず（本人は不本意だが）、まだ高校生でしかも女の子という、貴重な人材だ。
純や琥狼だけでなく、一度絵麻が仕事を受けた顧客からも同じ提案がいくつもきている。
しかし純や琥狼の場合は、単に絵麻のボディガードの腕を見込んでのことだけではない。
きっと彼らなりに気にかけてくれているのだろう――彼女の両親が行方不明なことに。

「だって、あの古い一軒家にまだ中学生の弟だろ？まだまだお金がかかるんだしさ。おじさんたちが帰ってきたときに、子供たちが路頭に迷っているってなってたら、かわいそうじゃないか」
そう、絵麻の家は古い日本家屋で、ぼろいながらもそれなりに維持費がかかる。
弟の夏音（かのん）はまだ中学生なのでバイトは出来ないし、かと言ってお金

がなくて進学出来ないなんてことにはしたくない。

「お気遣いありがとう。あんたも琥狼も、うちの家族と仲良くしてたから余計にそう思ってくれるのね」
「エマならもう俺らのことよく分かってるし、無理な依頼しても何だかんだ言って受けてくれるし、側にいても他の女の子みたいに気を遣わなくていいし、とにかく楽なんだよね」

そっちが本音か。
一瞬でも感動した自分が憎い。
そういえば、琥狼からも「お前と一緒にいると楽だ」を言われるのも、純と同じような内容だった。
純は女の子の前ではレディファーストに徹し、男友達の前では明るくひょうきんなキャラを通している。
琥狼は、男に人気があり兄貴と呼ばれ慕われているが、女性にはクールな態度であまり話さない。
それでも、その硬派な姿勢がかっこいと女性たちにはモテる。
共に人気はあるが、家庭環境から公の場で本音を簡単に漏らさないクセがあるので、愚痴や人の悪口を言うことはない。
しかし、絵麻の前では、本性の彼らは意地悪や辛辣な本音を遠慮なく言ってくる。
絵麻に素で接してくるのは気を許している証拠なのだろうが、無理難題を押し付けてこないよう他の女の子みたいに優しくしてほしいものだ。
かと言って、普通の女の子扱いをされたら、それはそれで気持ち悪いだろうが。

「本当にあんたたちって面倒くさいわね」
「琥狼と一緒にされるのは心外だなぁ。俺は純粋にエマに側にいてほしいだけだよ」

純は王子様スマイルで見つめられても、その腹の底にあるどす黒いモノを知っているだけに、ときめくものもときめかない。
絵麻はまたため息をついて、改めて窓の外を見た。
高速道路を降りて住宅街の風景に変わっているので、もうそろそろ家に着くだろう。
家に着いたらまず明日の宿題を済ませなければと、絵麻は一層気が重くなった。

目立ちたくないそんな彼女の事情ー６

それから数日間、絵麻にとって穏やかな日が続いた。
と言っても２日間だけで、純の依頼があったのが火曜日、叔父の依頼があるのが金曜――つまり今日だ。

（明日が休日だからって、少し遅めの仕事らしいけど…今日の家事は夏音に全部任せて、先に寝るように言わなくちゃ）

叔父が車で迎えに来るのは１７時、それまで図書館で勉強して、待ち合わせの裏門に行けばいい。
５限目が終わった後、絵麻は弟にメールを打ちながら図書室に向かった。

この学校の図書室はかなり広い。
地区一番の進学校ということもあり、公立高校でありながら所蔵冊数が地区の図書館以上に揃っているなど設備は充実している。
また、。オープンスペースには何十人も座れる机があり、さらに集中して勉強できるよう個別のブースも数多く用意されている。
絵麻はその個別のブースを使いたかったが、放課後に勉強する生徒に人気で今日はどこもいっぱいだった。

（仕方ない、今日はオープンスペースで勉強しようかな……あれ？）

絵麻は、オープンスペースの隅っこで見慣れた人物を発見した。
その女子生徒は、熱心に分厚い本を読みながらも難しい顔をして考え込んでいる。
絵麻が近づくと、その顔が上がり目と目が合った。

「おお、絵麻。君も勉強か？」
「そう、これから用事があるんだけど、それまで宿題でもやってようかと思って。秋良は塾の宿題とか？」
「いや、今度全国模試があるからな。家だと落ち着いて勉強できないから、最近は図書室でやってるんだ」
「毎回全国１０位以内なのに、まだまだ勉強必要なの？」
「上を目指すのに限界なんてないんだよ」

口端を上げて秋良は答えた。
伊本秋良（あきら）は、絵麻が中学生からの時の友人である。
ショートカットで身長１７０ｃｍ、男言葉を好んで使い、生徒会副会長を務めており人望も厚い。
そのさばさばとした性格と見た目から、並みの男よりも男らしいと女生徒に絶大な人気を誇っている。
絵麻が一緒に勉強したりグチを言い合ったり出来る数少ない友人だ。

「最近はどうだ、仕事も順調か？野宮と鷹村も特に目立ったことはしていないようだから、問題ないとは思うが」
「この間、急な依頼に付き合わされたけどね。今日はこれから叔父さんの仕事があるのよ」
「相変わらず人気者だな。そうだ、うちの父も今度お願いしたいと言っていたぞ。あれは護衛というよりも、単に君と話がしたいだけ

だと思うけれどな」
ちなみに秋良は、絵麻が純と琥狼のボディーガードをしていることも知っている。
秋良も表立っては知られていないが、有名な政治家一家の娘だ。
絵麻は秋良の父親や兄姉のボディガードも依頼されたことがあるので、伊本家とは家族ぐるみで付き合いが深い。

「私が政治家になったら必ず絵麻を専属で雇ってやる。それまで頑張れ」
「…気持ちはすごくうれしいけど、それってかなり先の話だよね？　その時はさすがにこんな仕事してないって」

嫌な顔をする絵麻に対して、天職だと思うけどなと肩をすくめながら、秋良は分厚い辞書をめくる。
絵麻も秋良の向かいの席に座り教科書を開くと、それからしばらく二人はそれぞれの作業に没頭した。

＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞

順調に宿題も終わり、秋良と別れて図書室を後にした絵麻は、そのまま裏門へと向かった。

あまり人目につかないよう、人が少ない校舎を歩きながら携帯電話で時間を確認する。

（叔父さんは17時には来るって言ってたから、今から行くとちょうどいいかな）

夏音にはメールもしたし、宿題は図書室で終わらせた。
あとは叔父の仕事が終わればひと安心だ。
本当は夜遅くから始まる会食に同席なのでこの時間に行かなくてもいいらしいのだが、着物に着替えるため余裕をもって準備するという。
着物だといざという時に動きにくいからなるべく避けたいが、依頼者の希望には応えなくてはいけない。
そろそろ叔父の車が見えるかもしれないと思い、絵麻は何となく裏門を見る。
すると、その目に思いもよらない光景が飛び込んできた。

黒ずくめの男3人に抱えられて、裏門から連れ去られる純の姿が。

「ちょ…！あのバカ……！！」

そう叫ぶと同時に、絵麻は猛スピードで走りだしていた。
窓からは裏門が見えるのに、校舎3階にいるためいちいち階段を降りるのがもどかしい。

3段飛ばしで一気に駆け降りると、1階の廊下である人物の姿を目の端にとらえた。

「琥狼！」

そこには、実験室から出てくる琥狼とその友人数人が歩いていた。けだるそうにズボンのポケットに手を突っ込んで歩いていた琥狼は絵麻の声に気付くと、友人との会話を止めてそちらを見た。普段なら決して学校では話しかけてこないはずなのに、しかも友人たちと一緒にいる琥狼に名前で呼びかけることなどないので、軽く目を見開いて訝しんでいるようだ。

「どうした」

「純！やられた！あとよろしく！」

それだけ言うと、絵麻は校舎から飛び出していった。

残された琥狼は眼鏡の真ん中を中指で押さえながら、片眉を上げる。

「……あれって、うちのクラスの高津だよな」

「何で鷹村のこと名前で呼び捨てにしてるんだ？」

「つか、あいつ大声出すところなんて初めて見た…」

「でも言ってる意味全然分かんなくね？」

クラスメイトたちが呆気にとられている中、琥狼はひとり離れて携帯電話を取り出した

「……ああ。純が誘拐された。今、絵麻が追っている。後で連絡がくるだろうから迎えを寄越してやってくれ。…頼む」

それだけ告げると琥狼は電話を切り、何気ない顔でいまだ首を傾げている友人たちの元に戻る。
ひと言「気にするな」と言うと、用事があるから先に帰ると下駄箱に向かって歩いて行った。

（くそっ、間に合うか！？）

絵麻が裏門にたどり着き辺りを見回すと、道路の向こうに黒い車の小さな後姿が見えるだけだった。
ここからではもうナンバープレートも見えない。
裏門から出てすぐの道路には純のカバンと、散乱した教科書やノートが散らばっていた。
どうやら裏門を出て瞬間を見計らって、黒ずくめの男どもに捕まえられたようだ。
携帯電話もそこに落ちていたので、ＧＰＳで位置を特定することは出来ない。
絵麻は息を切らして額の汗を袖で拭った。

「ちょっと、何で学校でそんな簡単に攫われちゃうのよ…！自分の身ぐらい自分で守りなさいっつーの！」

今までの経験上、身代金や会社に対する交換要求だと考えられるため、きっとすぐに純の命をとることはないだろう。
しかし、それまでに取り返しのつかない大怪我を負わされるかもしれない。
今、絵麻が立っているのはちょうど裏門の真上――本当ならば学校の敷地から出たことであれば、自分の契約範囲外のことだ。
あとは純の父親に連絡をしてあちらで対応してもらえば済む。
先ほど琥狼に連絡をお願いしたから、すぐに警察や優秀なボディーガードたちが動くだろう。
でも。

「目の前で連れて行かれたら、さすがに気分悪いのよね……」

絵麻は車が去った方向を見据えながら、感情の読み取れない表情でペロリと唇を舐める。
その時、後ろから車のクラクションが鳴り響いた。
絵麻が振り向くと、そこには叔父のシルバーの車が止まっていた。

「お、時間通りに待っているなんて珍しいなぁ。明日は雪か？」
「おじさん！ちょっと乗せてって！」

絵麻は助手席のドアを開けて乗り込むと、スカートのポケットから

携帯電話を取り出して何かを調べ始めた。
浩司はそんな絵麻の様子にただならぬものを感じて、そのまま車を走らせた。

「おい、どうした？」
「純が誘拐された」
「何だ、あいつまたか？本当に毎回懲りないやつだな」

浩司は大通りに向かってまっすぐに車を走らせながら言う。
絵麻はそれに答えず、相変わらず手元の携帯電話をいじっていた。

「で、お前は何やってるんだ？」
「ＧＰＳで位置を確認してるの」
「さっき裏門に、あいつの携帯落ちてなかったか？」
「携帯のじゃないわよ。これは指輪につけてる発信器から……あ、そのまま大通りまっすぐに行っていいから」

火曜日にパーティー会場へ行く車の中で、純がチェーンで首にかけている指輪を見せてもらった時。
会場で何かあったらと思い、純も内緒で小型発信器を指輪につけておいた。
純は監視されているのが嫌な性格なので、学校内や放課後はＧＰＳをわざと切っていることが多い。
絵麻はそれを知っていたので、あえて本人には内緒にしておいたのだ。
パーティーの途中で、護衛対象が美女とどこかへ消えてしまっては

困る――今までの経験から学んだことが、こんな時に役に立つなんて。

「現場には私ひとりで行くわ。叔父さんの依頼までにはちゃんと戻るから。あ、あと琥狼にも声かけといたから、後処理はしなくてもいいよ」

「はいはい、根回しのいいことで…俺が手伝ってやってもいいんだが、まあこんな誘拐の仕方する奴らなら、お前ひとりでも十分だな？」

浩司の何とも楽観的な発言に、絵麻は肩をすくめて答える。

「当たり前でしょ」

自分ひとりで解決して、それを恩に着せて臨時手当をふんだくろう。そう意気込む絵麻を乗せた車は、まっすぐに純を追って郊外へと走って行った。

目立ちたくないそんな彼女の事情－7

（あー……体が痛い）

純は、薄暗い雑居ビルの一室のようなところに転がされていた。
一室といっても大きなビルのフロア並みに広いので、元々は倉庫として使われていたのかもしれない。
カーテンがきっちりと閉められているため外の様子は見えないが、もうすでに夜になっているのだろう。
手足をロープで縛られているため、純は首だけを動かして周りを見渡した。
純を連れ去った黒服の男たちは近くにはいないようで、物音がなくしんと静まり返っている。
時折車が通る音が聞こえるので、移動時間を考えると都心から車で一時間ほどの場所だろう。
郊外の工場や事務所が多い地域であれば、夜は人がほとんどいないので監禁するのにはうってつけだ。
そういえば連れ去られる時には目隠しと口が塞がれていたが、今はそれが取り外されていた。
男たちに連れ去られる時にあまり抵抗しなかったせいだろうか。
もしくは、叫んでも助ける人間が周りにいないと分かっているからなのかもしれない。
純自身も、この状態で助けを呼ぼうなど考えていなかった。
助けが来る見込みもないのに試すような無駄なことはしないし、抵抗することで犯人たちを刺激して逆に身が危うくなるのも避けたい。
父親から叩き込まれてきた経営学の中でも、全力を尽くす時か潔く引く時かを見極めることが大事だとある。
まだ犯人たちから何も要求を突き付けられていない今、おとなしく

しているのが一番だと純は判断した。

（しっかし、どうしたもんかな…このまま助けが来るのを待っててもいいんだけど）

純は寝返りを打って、大きな欠伸をした。
絵麻が見ていたら、きっと「何て緊張感のない！」と怒鳴りつけられるだろう。
彼女を無理矢理伴ってパーティーに行ったのは火曜日のこと。
それから3日後の今日の誘拐――それと現在純が抱えている後継者問題を照らし合わせると、おのずと犯人の狙いも分かってくる。
それにこんなのは毎度のことなので、今更慌てることもない。

純は、本当に昔から誘拐されることが多かった。
天使のようにかわいいと幼児趣味の男に連れ去られたのをはじめとして、職業柄人に妬まれたり恨まれたりすることが多い父親の代わりに純が誘拐されることが幾

度もあった。
社長である父親の周りには日夜強固な警備が敷かれていたため、比較的狙いやすく脅迫材料として効果のある純は格好の標的だったのである。
そのため、小学校や中学校では構内でも遊びに行った先でもボディーガードが何人も付いていた。
それが嫌で逃げ出したこともあったが、その度に誘拐されるため、さすがの純も自分を取り巻く問題を受け入れざるを得なくなった。
と言っても、素直に監視生活を送るのも耐え難かったので、色々なコネを使って絵麻を護衛にすることで落ち着いたのだ。

おかげで今の学校生活は楽しい。
学校の中では会社の利害関係なく友達と遊べるし、腹の探り合いをしない人の付き合い方が出来る。
同じように絵麻に護衛を依頼している琥狼も、きっと同じ気持ちだろう。
お互いの立場もあるため表立っては付き合いをしていないが、琥狼とは正反対の性格でありながらも驚くほど馬が合う。
だから、あの表情だけでは感情が読み取れない琥狼が考えていることも、手に取るように分かるのだ。
――琥狼も絵麻を側に置きたがっていることを。

（なかなかいないよ、あんな子は）

純は、絵麻と初めて会ったことのことを思い出す。
物心ついた時から大人に囲まれて、早くに社交界にも顔を出している自分の本当の気持ちを瞬時に見抜いた少女。
天使のようだと称賛されるこの顔に笑顔を張り付けていれば、大抵の人間は心を許して友好的になる。
そんなニセモノの自分にあっさりと騙される大人を、何て周りの大人は馬鹿なんだろうと純はいつも冷めた目で見ていた。
しかし、何故か初めて会っただけの彼女には分かってしまったのだ。
最初は見抜かれたことの悔しさと後ろめたさを感じて冷たく当たったりもしたが、それに対する絵麻は何の反応も返さなかった。
自分に全く興味を示さなかったことにさらに怒りが増すのと同時に、誰に対しても同じ態度を取る絵麻が気になって仕方がなくなり、さらにつらく当たった。
純がどんなに見目麗しい容姿をしていても、家が大金持ちだとしても、本当の性格がひねくれていても、彼女の態度は決して変わらな

かったのだ。
絵麻は特別なことをしたつもりはないだろうが、純にとっては天地がひっくり返るほど衝撃的で新鮮だった。
それは今も同じだ。
純が悪いことをすれば怒るし、問題を抱えている時は何も告げなくても察して心配をしてくれる。
そんな当たり前のことをしてくれる人間は、彼の周りにはそうそういない。

（しかも、そんじょそこらの男よりも強いし…だから、欲しいんだよなぁ）

今後、純の行く道には彼女のような全幅の信頼を置けるような人間が不可欠だ。
しかし、彼女の将来に純や琥狼の望む道は一切含まれていない。
長期戦になるだろうが、欲しいものはどんな手を使ってでも手に入れろという信条――これも父親から叩き込まれたものだが――は簡単に曲げられない。

純は縛られて寝ころんだまま、ひとり頷いて決意を新たにしていると、今まで静まり返っていた部屋の中に、複数の靴音が騒がしく響いた。
黒いスーツを着た数人の男たちが入ってくると、そのまま純の方へまっすぐ近づいてくる。
黒いサングラスをしているので顔は分からないは、助けではなく純を連れ去った男たちだろう。
その中でひとり、上質なグレーのスーツに身をまとった４０代位の男が純の前で立ち止まった。

「久しぶりだね。純君」
「……どうもお久しぶりです、坂本さん」

純は近づいてきた男の顔も見ずに、背を向けたまま答えた。
その言葉に坂本と呼ばれた男は片眉を上げる。

「その様子だと、もう私のことはよく分かっているようだね。さすが、次期社長として育てられてきたことはある――まあ、それも今日までだが」

坂本は感心したように顎をさすりながら、薄く笑いを浮かべた。
純は背を向けたまま口を閉ざしていて、じっとしている。

「君の能力の高さは認めよう。しかし、この世界はそれだけではやっていけないのだよ。今の君に足りないのは経験――それはこれから積めばいい。だがそれは数
十年はかかることだ」

坂本は口元に笑みを浮かべたまましゃがみこんで、純に向かってさらに語りかける。

「だから、その間は他の人間に任せておくがいい。――社長の片腕である、この私にね」

その言葉を聞いて、純は坂本に気取られないよう小さくため息をついた。

何とも分かりやすい理由だ。

この坂本は、長年純の父親の側近として働いている有能な人材だった。

純のこともかわいがってくれていたが、純を見る瞳の奥に黒い影が見え隠れしていたのは知っていた。

ただの息子というだけで、せっかく育て上げてきた会社をとられるのが癪だったのだろう。

最近、純が頻繁に父親と一緒に重要な商談や会議に出席していることに加えて、この間のパーティーではとうとうホストを務めた。

そのことで急速に後継者の座を確立していく純を見て焦りを感じた坂本が、この誘拐を企てたということらしい。

野心のある人間は嫌いではないが、私情に走ったうえ非合法な手段に訴えるなど、トップに立つ人間のすることではない。

しかも勝算のない戦いに挑むなど、もっての外だ。

純は目を閉じて、もう一度小さくため息をつく。

その時――――何か、空気の流れが変わったような気がした。

「な、何だ!?」

背後の異変に気が付いた坂本が振り返ると、後ろに控えていた数人の黒服たちの数が明らかに減っていた。
狼狽える坂本と、残った黒服数人が部屋の薄暗い奥を目を凝らして確認している。
相変わらず純は背を向けたまま寝転がっている状態だったが、すでに確信していた。
これからようやく手足が自由になるということと、この後耳にタコができるくらいに説教を聞かなければならないということを――――。

目立ちたくないそんな彼女の事情ー8

純が黒幕と対峙している少し前のこと――。

絵麻は純の指輪につけていた発信機を頼りに、郊外のとある雑居ビルの前にいた。
すでに日は落ちており、元々街灯も人も少ないためより一層ひっそりと静まりかえっている。
浩司は絵麻を車から降ろすと、そのまま事務所へと戻って行った。
今夜絵麻が受けていた仕事の代役を探しに行ったのだ。
その依頼は“一見か弱そうに見えるアジアの黒髪の少女”というものだったため、簡単に絵麻以外の適任が見つかるものではなかった。
実は、浩司の会社には女性社員は絵麻を除いて2人しかいない。
しかも、彼女たちは基本的に海外勤務だ。
浩司は最終手段として「誰かに女装させよう」と言っていたので、きっとたまたま手が空いていた運の悪い社員が被害を被るのだろう。
せめてマッチョではない、華奢な若い社員が捕まることを祈るしかない。
絵麻は心の中でその哀れな同僚に謝りながら、雑居ビルの中へと足を踏み入れた。

ビルの中は普段使われている様子がなく、外のわずかな街灯と月明かりだけだったため、かなり薄暗かった。
絵麻は暗がりでも人の動きが分かるように訓練されているが、椅子や機械のようなものが床に散乱しているのでなかなか歩きにくい。
ビルは5階建てで、今絵麻がいる1階には誰もいないようだ。
おそらく、純を攫った人物は後継者争いの関係者だろう。

この間のパーティーには特に怪しい動きは見せなかったが、それは純たちを油断させるためだったのだろうか。
普段の純であれば、こうも簡単に連れ去られることはないはずだ。
それが、放課後のボディーガードたちの目をかいくぐって裏門に一人でいるなんて、後継者問題も収束していないのに油断し過ぎるにも程がある。
絵麻は、手に持っている濡れたスポーツタオルを握り絞めた。
これは、純の鞄に入っていたものだ。
裏門に散らばっていた純の持ち物を回収したのだが、その中にあったこのスポーツタオルは武器として役に立つと思い持ってきた。
絵麻は基本、身体ひとつで護衛にあたる。
人によっては銃やナイフ等、自分の能力を最大限に発揮出来る武器を持っている者も多いが、絵麻はとっさに人を傷つけたくないので武器は持たないようにしている。
ただし、今回のように明らかに人数で分が悪い時は、何かしら武器になるものを持つこともある。
己の身ひとつでも対応出来るが、武器があった方が少しの力で済むからだ。
今は身の回りにあるものでとっさに使えそうなものといったら、このスポーツタオルしかなかった。
水に濡らすことで相手の口を塞いだり首を絞めたり等、ダメージを与えることが出来る。
そういえば昔、琥狼に暴漢が襲いかかった時には手持ちのシャーペンを使ったこともあった。
相手はナイフを持っていたのに、よくあれで対抗出来たものだと昔のことを思い出しながら、絵麻は周りを見渡す。
先ほど階上から複数の足音が聞こえてきた。
おそらく１０人はいるだろう。
さすがにいっぺんに相手をするのは危険なので、まずは分散させて倒していくことにしよう。

絵麻は、近くにあったドラム缶を蹴り倒した。
ゴオオオンと大きな衝撃音がビル全体に響く。

「さあ、さっさと早く来てよね……早く終わらせて、早く家に帰りたいんだから」

絵麻は来たる敵に備えて、物陰に身を顰めた。

＞＞＞
＞＞＞＞＞

「おい、今派手な物音がしたよな？」

最上階に純を転がしておき、ビル全体の見回りに行っていた黒服の男たちは、階下の異常に気が付いた。
この時間に、使われていないビルの中に入る人間などいないはずだ。
野良猫か、廃墟ビルを面白がって肝試しに来る若者か――どちらにせよ、一度確認しておくに越したことはない。

「誰か見に行って来い」
「分かりました」

リーダーの男に指示され、３人の男たちが下へと降りて行った。
１階に着くと、大きなドラム缶が階段の前を塞ぐように倒れており、辺りには何かがいる気配はなかった。
何かの拍子にドラム缶が倒れただけだろうかと思いつつも、男たちは暗闇の中を念のために分散して見回ることにした。

雑居ビルといっても、倉庫代わりに使われるくらいなのでそのフロアは広い。
男のひとりは、暗闇の中を警戒しながらも、柱の裏や積み上げられた机に異常がないか目を凝らす。
さすがに窓から入る月明かりだけでは遠目から判断出来ないため、ゆっくりと机の山に近付いた。
その時。

「うっ！？」

声を上げる間もなく、背後から何かに口が塞がれた。
足を足で絡められ固定され、そのまま口を塞ぐもので頭が後ろに引っ張られる。
首が思い切り反らされ、声が出ない。
呼吸もほとんど出来ないため、意識が朦朧としてくる。
男はろくに抵抗も出来ず、しばらくして意識を失いその場に崩れ落ちた。

「……まずは一人」

絵麻は、男が意識を失ったことを確認して、他の黒服たちを仕留めるためにほぼ何も見えない暗闇に目をやった。
足音からして1階に下りてきた犯人たちは3人。
ここで3人を片づけてまた派手な物音を立てれば、さらに数人が様子を見に下りてくるだろう。
そうやって人数を減らしていけば、後に残るのは黒幕だけだ。
おそらく黒幕は純の側にいて、何かしらの交渉なり脅迫なりをしているに違いない。
だが、純は飄々とした態度であしらって相手を逆撫でしているような気がする。
より悪い展開になる前に、早く最上階にたどり着かなければと、

しかし、今回は暗くてよかった。
制服で暴れたらスカートの中が丸見えになって、気になって満足に動けなくなってしまう。
いつもだったらスカートの下に短パンを穿くが、今回はもちろんそんな余裕はなかった。
ちなみに、純は学校外の護衛の時はよく絵麻の服を着替えさせる。
この間のパーティーでは秘書姿だったが、それ以外にも着物やフリフリのレースワンピース、水着なんて時もあった。
もちろん制服で護衛するわけにはいかないので、どの依頼でも毎回着替えているが、純のはコスプレに近い衣装を着させるのだ――依頼主の指示であれば絵麻が断れないことを知っていて。
さすがに水着の時は上にパーカー、下にショートパンツを穿いたが、今でもその時の屈辱は忘れていない。

『ねえ…俺がお願いしたのは水着で、だったよね？こんなの着てち

ゃあダメじゃない』
とあるリゾートホテルのプールサイドパーティーでの依頼があった時のこと。
純は自分もハーフパンツタイプの水着を着て、恥ずかしさで俯きながら出てきた絵麻に近付いた。
絵馬は「大胆なビキニ姿で護衛なんて出来るわけないでしょう！」と叫びたかったが、いかんせん腐っても彼は依頼主で、絵麻はその依頼内容に反することは出来ない。
純は笑顔で下を向いたままの絵麻の腰に両手を回すと、しばらく絵麻の頭のてっぺんを眺めていた。
そして、絵麻のパーカーのジッパーをゆっくりと下ろし、肩からするりと落とす。
両肩は露わになったが腕には服が引っかかったままで、その手はショートパンツへと伸びだ。
チャックを下ろされ、そのままショートパンツが脱がされる段階になって我に返った絵麻は、見事な回し蹴りで己の身の危機を回避したのである。

（今回のことと言い、何でこんなに毎回純に振り回されなきゃいけないのよ。私が困ってたり恥ずかしがっているのを見て、ストレス解消してるんだわきっと…ああ腹が立つ！）

絵麻はあの時と同じような見事な回し蹴りを黒服たちに食らわせ、床に沈めた。
この物音で、さらに上にいる黒服たちが様子を見に来るだろう。
絵麻は同じ手順で残りの黒服たちを次々に片付けていき、難なく最上階へとたどり着いたのである。

目立ちたくないそんな彼女の事情ー9

「あ、来た来た。もう俺、待ちくたびれちゃったよ」

相変わらず縛られたままで床に転がされているにも関わらず、純は笑顔で幼なじみを迎えた。
そんな純を、堂々と最上階のドアを開けて入ってきた絵麻は半眼で見つめる。
先ほどまでは人数を減らすためにひっそりと行動していたが、数十人もの黒服を伸した今、こそこそ隠れる必要はなくなった。
今この部屋にいるのは、純と黒幕と2人の黒服たちだけだ。

とにかく絵麻は腹が立っていた。
最上階まで階ごとに数人の黒服を倒したのは、そんなに大変なことではなかった。
絵麻がどんなに強くても、武器もなしに一度に数十人を相手にすることはさすがに厳しいが、今回程度なら息を切らさずに片づけることが出来た。
命を取られることはないだろうが、一応身を心配しながら純の元へとたどり着いてみれば———当の本人は緊張感のないへらへらとした笑顔でいる。
こちらは別に仕事があったのも放り投げて助けに来ているというのに…。
そういえば、連れ去られる純を追いかける時に琥狼に後処理を頼んできたが、彼の周りにクラスメイトが数人いなかったかだろうか。
あの時はとっさに琥狼を呼び捨てにしてしまったが、あれだけ大声で叫んでしまったのだ、彼らにも聞こえてしまっていただろう。
きっと琥狼がうまく誤魔化してくれているだろうが、普段の絵麻な

らば決して犯さないミスだ。
あんなに純や琥狼と一切の接点がないよう細心の注意を払って学生生活を送っていたのに。
これもすべて、純があんなにあっさりと誘拐などされるからだ。
今後の学校生活に支障が出たらどうしてくれるのか。

絵麻はそのままつかつかを足を進めると、急な侵入者に驚いていた黒服たちも我に返って絵麻に掴みかかった。
絵麻は特に動じることもなく足を振りあげると、その勢いのまま男の首にのめり込ませる。
強烈な回し蹴りを食らった男が派手に床に倒れるや否や、絵麻は反対側から殴りかかってきた二人目の拳をかわす。
体をひねったまま男の足を払うと、そのまま首に手刀をお見舞いして男を床に沈めた。
この時間はわずか5秒。
あっという間の出来事に、黒幕である坂本も驚きのあまり声が出なかったようだ。
絵麻は構わず足を進めると、純の前で立ち止まった。
まさに、腕を組んでの仁王立ちである。

「ちょっと、あんたいつまでこんなところに転がってるわけ？」
「俺だって好きでこうしてるわけじゃないんだけど……つうか、助けに来て最初のひと言がそれってどうよ」
「これでも穏やかに話ししてんのよ。こんな簡単に誘拐されて、それでも過去何十回も誘拐されてきた人間なの？少しはうまく対処しなさいよ！」
「いや、俺もまさかあんな所で待ち伏せされてるなんて思ってなくてさー」

「とか言って、どうせ護衛まいてクラスの女の子たちと遊びに行こうとでもしてたんでしょうが！」
「違うよ、失礼だなぁ。今日はＯＬのお姉サマたちとだし」
「…相変わらず軽い性格ね。だからなめられてあっさり誘拐されるのよ」
「そう言われてもねぇ…今回ばかりはしょうがない。……ね、坂本さん？」

純は目線だけを向けて、呆然と二人のやり取りを見ていた坂本に話しかける。
坂本はその声にはっと我に返り、顔を顰めて純を見据えた。

「社長が君に専属ボディーガードを付けているとは聞いていたが…まさか、こんな普通のお嬢さんとはね。我々も油断していたよ」
「彼女のことはシークレットなんで、社内の人間もほとんど誰もいないんですよ。ほら、ボディーガードが目立っちゃうと、変なこと考える輩がなかなか出てこれないでしょ？」
「……私はまんまと君の思惑通りに動いたということか」

坂本の悔しがる声を聞いて、純はにっこりとほほ笑んだ。
その間、絵麻は自分の怒りを鎮めて、純の両手両足の拘束をほどく。
自由になった手足を軽く動かしながら、純は軽やかに立ち上がった。

「俺、坂本さんのことは本当に可愛がってもらったから、あまり事を荒立てたくないんですよ……俺の言ってる意味、坂本さんなら分かりますよね？」

「………」

相変わらず純は笑顔のままだが、目だけは鋭く光っている。
ここまで派手に純を誘拐したのだ、彼らには何かしらの勝算があったのかもしれないが、すべてが失敗に終わった今、どんな結末が待っているのか目に見えている。
純も、純の父親も、裏切者は決して許さない。
坂本は観念するように固く目をつぶり、その場に膝をついた。

その時、階下から複数の人の足音が聞こえてきた。
おそらく純の父親が寄越した護衛たちだろう。
琥狼が連絡を入れ、浩司が彼らを案内してきたというところだろうか。

銃を持って武装した男たちが一気になだれ込むと、うなだれている中年の男を引き連れてあっという間にその場を去った。
いつもながら素早い行動だなと思いながら、絵麻はほっと息をつく。
各階で倒した黒服たちも1時間は意識が戻らないはずだが、特に縛る余裕もなかったため、いつ目を覚ますか心配していたのだ。
あとは、彼らがすべて処理してくれるだろう。

＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞
＞＞＞＞

「あー、体中が痛くてしょうがない」

純と絵麻以外誰もいなくなった後、純は肩をぐるぐる回してストレッチをしながらぼやいた。
絵麻はそんな緊張感のない純の様子を見て、キッと睨む。
そして、純の胸倉をつかんで、上下に前後に思いっきり揺さぶった。

「あんたねえ～」
「ちょ、くるしいくるしい！」
「今回はきっちり時間外手当て3倍はもらうからね！？」
「わかった、わかった！だから手、手！」

絵麻はぱっと手を離すと、純はせき込みながらも話し続けた。

「いやーでも、エマが来てくれて助かったよ。琥狼も手伝ってくれたみたいだし、後は親父がうまくやってくれるからね。坂本さん、なかなか尻尾見せないもんだから、俺も焦ったよ」
「……やっぱり、元々そのつもりだったのね」
「ん？」

純はニコッと笑顔を向ける。
途中から何かがおかしいと思っていたのだ。
純があんなにあっさりといつものボディーガードたちをまけたのも、特に抵抗もせず簡単に連れ去れてしまったのも。

「だって、普通にお願いしてもエマは引き受けてくれないだろ？学校内だけの護衛でも他人のフリしてまで嫌がるし…あ、今回のことは、ほとんど周りの人間には知らせてなかったんだ。坂本さん、親父の側近だからどこから漏れるかわからなかったし。ほら、敵をだますなら味方からってね」
「……もしかして、火曜のあのパーティーの依頼も…」
「うん、前もって俺が狙われてるって分かってれば、エマが目を光らせてくれると思って。あとは坂本さんに揺さぶりかけてボロ出してもらって一気に解決しようかなってのもあった。うまい具合にエマが助けに来てくれたのは、うれしい誤算だけどね」

純はいたずらが成功した小学生のように嬉しそうに話す。
それを絵麻は下を向いたまま黙って聞いていたのだが。

「…か」
「うん？」

純は、俯いたままの絵麻に近寄って耳を寄せた。
その瞬間、ゴッと音がして純は勢いよく仰け反った。
顔を近づけてきた純のあごに、絵麻が思いっきり頭突きを食らわせたのだ。

「痛っ！何だよいきなり」
「この馬鹿！！」

その怒鳴り声に、純はあごを押さえたまま目を丸くした。
絵麻は唇をかみしめて、純を睨みつける。

「今回は助かったけど、一歩間違えれば殺されてたかもしれないのよ！あんたは会社のモノじゃないんだから、犠牲になる必要なんてないの！もっと自分を大事にしなさいよっ」
「……」

絵麻は、自分がうまく使われたことも事前に相談がなかったことも腹立たしかったのだが、純がそんな世界に当たり前のように染まってしまっていることが何よりも憤りを感じた。
純は自分を囮にして会社に反感を持っている人間をあぶりだしたが、本当ならその彼を身を挺して守るのが絵麻たちボディーガードの役目なのだ。
学校内だけの契約と言えど、目の前で誘拐されるなどもっての外。生活のため仕方なくバイトをしている絵麻だが、お金をもらう以上はそれに見合う働きをしなくてはいけないと考えている。
手を抜いてもいいはずのところでも、生真面目にやってしまうのが絵麻の性分なのだ。

純はあごを押さえた姿勢のまま、少し驚いた顔で絵麻を見つめていた。
すでに十秒は沈黙が続いていただろう。
そして、ふっと空気が動いたかと思うと、純は絵麻の体に自分の両

手を絡ませてふわりと包み込む。
急に目の前が純の着ているベージュのニットでいっぱいになって、絵麻は目を丸くした。
そんな絵麻の様子を楽しみながら、純は絵麻の頭のてっぺんにあごを乗せながらぐりぐりと動かす。

「…な、なに」
「だから、俺の専属になれって言ってるのに」
「……なんで」
「そしたら隠し事一切なしで、囮でもだまし討ちでも何もかも話すよ？聞かれたことには全部答えるし、報酬も欲しいだけ出す。これからは早々に危ないことなんて起こさせないし、俺の側にいれば楽しいことだらけにしてあげる。…これって、かなりおいしい話じゃない？」

最後は、黙ったままの絵麻の右耳に口を寄せて甘い声でささやく。
いつもこれで、大抵の女の子は顔を真っ赤にして純の言う通りに頷くのだが。

「って、そんな言葉に騙されるわけないでしょう！」

また純のあごは、絵麻の頭突きによってダメージを受けた。

「大体、依頼がなくてもあんたの側にいたら女の子たちに恨まれる

わ、メディアに囲まれるわで休まる時がないじゃない。どんなにお金積まれたって、平穏な生活が送れないんじゃ意味ないから！」
「ちぇっ、やっぱり流されなかったか」

純は絵麻からあっさりと手を離して、ふてくされた様子で部屋のドアへと向かう。
階下からは、後処理を終えた純の会社の人間が彼を呼ぶ声が聞こえていた。
おそらく叔父の浩司も、絵麻を迎えに表に来ていることだろう。
すでに純は階段を降りていっており、先ほどまで絵麻を口説き落としていた変に甘い雰囲気は一切なくなっていた。
本気だか冗談だかいつも掴めない純の背中を追いながら、絵麻も階段を駆け下りて行った。

目立ちたくないそんな彼女の事情－１０

キーンコーンカーンコーン。

６限目の授業を終えるチャイムが鳴る。
絵麻にとって、今日も一日が無事に終わったことを告げる合図だ。
いつも通り教科書一式を手早く鞄に入れると、絵麻は図書室へと向かった。

今日は金曜日。
どの生徒も放課後は遊びに行くらしく、金曜日はいつも比較的人が少ない。
絵麻が図書室のドアを開けると、いつもの場所に見慣れたショートカットの女子生徒がいた。

「やあ、絵麻」

手を軽く挙げて絵麻を呼ぶのは、秋良だ。
絵麻は秋良の前の席に座ると、さっさと宿題を片付けるため鞄から教科書を取り出す。
そのまま二人は特に話すこともなく、黙々と問題を解いていった。
３０分程経って、お互い今日のノルマ分は終わる目途が立った頃、秋良は分厚い英語の辞書をめくりながら絵麻に話しかけてきた。

「最近、野宮は本格的に経営に関わるようになったらしいな」
「ああ、うん。そうらしいね」
「どうやら、会社内のゴタゴタが解決したということで、株も急上昇しているらしいぞ。野宮も毎回狙われてばかりで大変だな」
「……秋良、よく知ってるわね」
「うちの情報網から簡単に入手出来るものでな」

秋良はにやりと口端を上げた。
さすが政治家一家、政財界の動きはすべて把握しているだけはある。
絵麻は数学の計算式を書きつつ、左手で頬杖をつきながらため息をついた。

「何だ、なにか不満でもあるのか？」
「不満っていうか、今回の騒動にちょっと巻き込まれたから、思い出すと疲れるの」

先週の純の誘拐騒動があったせいで、絵麻はその週末は後処理に追われていた。
と言っても、警察での事情聴取などではなく、純の父親に感謝されまくったせいで土日は一日中高級レストランやらショッピングやらに連れ回されたのだ。
食事はともかく、いつも買うよりも一桁値段が違う服を何着も勧められたときは、さすがに固辞した。
平穏な生活を送るためには、自分の身の丈に合ったモノを選ぶのが基本である。
絵麻が純はというと、社長である父親に代わって新たに人事異動や

組織改革の先頭に立ち、今回の騒動の後始末に追われていた。
そうすることで次期社長の風格を周囲に知らしめ、今後同じ輩が出てこないようにするためだ。
どうやら今回の黒幕だった坂本が反勢力をとりまとめていたので、その心配はほぼなくなったようだが。

「まあ、報酬も多くもらったのならいいじゃないか。それに野宮の身辺が落ち着けば、いつも嫌がっている時間外の依頼も少なくなるんだろう？」
「そうなんだけどね…学校外での仕事がなくなると、純のお父さんが無理矢理別の仕事を依頼してきそうで、それはそれで困るのよ。そのまま気が付いたら専属にされてそうで怖い」
「絵麻は頼まれると最終的には断れないからな。自分のことが分かっているのはいいことだ」

そう、絵麻が学校以外の依頼は一切受けないと主張すれば、純も琥狼も無理強いは出来ない。
“学校内限定の護衛”――そういう契約だからだ。
しかし、それでも彼らが毎回プッシュするのは、絵麻が嫌がって文句を言いながらも結局は引き受けてくれるのを知っているから。
そして、一度引き受けた仕事は必ず達成すると確信しているからだ。
ある意味、絵麻の人の好さにつけ込んでいるとも言えるが。

「今度はうちの家族の依頼も受けてやってくれ。それが無理でも、うちに遊びに来てくれるとみんな喜ぶ」

秋良は小首を傾げて絵麻へ笑いかける。
普段は凛々しい秋良のその甘い笑顔に、思わず絵麻も胸がドキッとしてしまった。
これが上級生から下級生までの女子を虜にするという、魔性の笑みか。
美人に免疫のある絵麻でも、いまだに慣れることはない。
秋良はこうやってうまく周りを手のひらで転がしながら、政治を回していくんだろうなぁと思いながら、絵麻はふと時計を見る。

「あ！」
「どうした？」
「今日は5時からスーパーの特売の日だった！急いで行かなきゃ！」

絵麻は急いでノートを鞄に詰め込む。
「じゃあね！」と秋良に声をかけると、図書室を飛び出して行った。

「……あれが、各界の要人がこぞって欲しがる凄腕のボディーガードだなんて思えないな。まあ、彼女のあんなかわいいところは、私達だけが知っていればいいか……それは野宮達も同じ気持ちだろうが」

秋良は絵麻の出て行ったドアを見ながらそう呟くと、残りの塾の宿題を片付けるため、またひとり黙々と取り組んでいった。

＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞

（ああああ特売まだ間に合う！？）

廊下を走ると先生に怒られるため少し駆け足しながら、絵麻は下駄箱へと急いだ。
途中角を曲がると、廊下の向こうからひと際騒がしい集団がやって来るのが見える。
その真ん中には、学校内では久々に見る人物がいた――――純である。
純は、今どきのおしゃれな女子達に数人に囲まれて、笑顔を振りまきながら歩いていた。
今週は学校を休みがちだったので、きっと女子達は久々に会えてテンションが上がっているのだろう。
純の腕に自分の両腕を絡めている子もいる。
そんな様子を見て、絵麻は一瞬回れ道をしようと思ったが、別の道を通ると余計に時間がかかるので諦めて素通りすることにした。
純は学校内では絶対に話しかけることはないし、意識的に絵麻とは一切の関わりを持たないようにしている。
入学当初うっかり話しかけてきた純に対して、絵麻は学校内で仲良くしようとするなら今後仕事は一切受けないと怒りまくったからだ。
そして、それから数週間無視し続けたため、純もその約束をしぶしぶのんだのである。
だから今回も、純は絵麻には目もくれないで女子達と楽しく会話を続けるのだろう。
絵麻は俯きながら小走りしながら、廊下をほぼ占領している集団の

隣をすり抜ける。
きゃあきゃあと黄色い声を背に、絵麻がそのまま下駄箱へ続く階段に差し掛かろうとしたその時。

「あ、ねえ、高津さん」
「！！？」

驚いて勢いよく後ろを振り返ると、純が笑顔でこちらに向かってきていた。

「これ、今落としたよ」
「……」
「今度は気をつけてね？」

呆然と立ちすくんでいる絵麻を前に、純が何かを握っている手を差し出す。
何か落としただろうか…いやそれよりも純が話しかけてくるという事実がまだ受け止めきれていない絵麻だったが、反射的に手を出して受け取った。
純はそれ以上話すことはなく踵を返して女子達の元へ戻ると、そのまま廊下の角を曲がって見えなくなった。
そして、絵麻がそっと渡されたものを見てみると…。
手には小さなビーズくらいの丸いモノ———それは、絵麻が純の首に下げている指輪につけた発信器だった。

（！！！！！！！！）

絵麻はその発信器を思いっきり握りしめると、すでに純が見えなくなった廊下の角を睨みつける。
純は、絵麻が指輪に発信器を取り付けたことに最初から気付いていたのだ。
それにも関わらず知らないふりをして、絵麻が自分の思い通りに動くことを前提に今回の囮計画を考えたのだろう。
自分が誘拐されるのも、絵麻が後から追いかけてくることもすべて計算済みだったのだ。

（してやられた…！）

カァーッと久々に頭に血が上る。
普段感情をあらわにしない絵麻を、色んな意味でかき乱すのは彼ら幼馴染くらいだ。
しかも付き合いがある分、悪気がないことも分かるので絵麻も最後には結局許してしまう。
今回のことだって純が狙われていたことは本当だったし、無事だったのだからこのくらいのことは目をつぶってやろうと思う自分がすでにいる。

キーンコーンカーンコーン。

チャイムの音で我に返った絵麻は、ちっと舌打ちをした。
純に文句を言ってやりたいが、今はそんな時間はない。
特売でお目当てのものが買えないと、弟である夏音に笑顔で責めら

れてしまう。

（もう絶対に学校外の依頼は受けない！でもってこの間の報酬は3倍じゃなくて5倍でもらってやるわ！）

それで今回のことは怒らないでおいてやろう。
そう心に固く誓って、絵麻は特売のしょう油や砂糖等々を手にすべくスーパーへと急いだのだった。

……結局、数週間後にはしかめっ面ながらも幼馴染の背後に控えている絵麻の姿を見ることとなる。
これもいつもの光景――――。

番外編：ある日常のひとコマ（前書き）

いつもお立ち寄りくださりありがとうございます。
本編であまり純と絡まなかったので、ここで少し息抜きです。

番外編：ある日常のひとコマ

（……げ）

いつもの学校からの帰り道。
絵麻は、最寄り駅を降りて特売のチラシを握りしめながら、スーパーへ寄ろうとしていた足を止めた。
駅前のロータリーに止まっている車と、近くにいる人物に見覚えがあったからだ。
制服姿の男子高校生と、茶髪の長い髪の年上の女性が何やら高級車の側で話をしている。
風にたなびく男子生徒の蜂蜜色の髪を見た瞬間、絵麻は気づいてしまったことを後悔した。
学校内では飽きるほど見慣れているその姿は、幼馴染である野宮純だったのだ。
いつもならこんな学校から離れた駅にいるはずないのに、こんなところでデートの待ち合わせだろうか。

「…この間、他の女の子と歩いてたでしょう」
「他の女の子？それっていつのこと？場所は？俺、たくさん心当たりありすぎてどれか分かんないなぁ」
「なんですって！？」

――――――修羅場か。修羅場なのか。
何となく予想はしていたが、まさか駅前で繰り広げているとは思わなかった。
おそらく彼女というわけではなく、どこぞのパーティーで知り合ったモデルやＯＬで、数回遊びに行った仲なのだろう。
とにかく関わっていいことがあるわけがない。

（早くスーパーに行こう…特売売り切れちゃうかもだし）

と、絵麻が踵を返した瞬間。

「あっ」

突風が吹いて、手にしていたチラシが飛んでいってしまった。
今回はチラシにクーポン券がついているので、ないと非常に困る。
絵麻は風に飛ばされてふわふわと飛んでいくチラシを追ったが、不確定な動きなのでなかなか捕まらない。
やっと地面に落ちたチラシを手に取ったが、そのすぐ側で茶色のローファーが目に入った。
絵麻がおそるおそる見上げると、目を丸くしてこちらを見つめる色素の薄い瞳とぶつかる。

（……しまった！！）

絵麻がそう顔に出すや否や、純はにっこり…いやニタリと笑いかけてきた。
絵麻は本能で危険を察知してすぐに立ち上がり逃げようとしたが、手首を掴まれ強引に引き寄せられる。
思わずバランスを崩してしがみついたのは、純のベージュのニットで———そのまま反転させられ、絵麻の肩と腰は純の手でしっかりと抱き込まれていた。

「…何よ、その子」

絵麻は純を背に女性と対面する形になっていた。
まさに、彼と彼女の間に割り込んできた浮気相手という構図だ。
絵麻は「違うんです、ただのクラスメイト以下で通りがかりの女子高生です！」と訴えようと口を開いたのだが。

ちゅっ。
こめかみに熱く湿った感触。

「この子は、俺の大切な子」

途端に女性の顔が強張った。
化粧も完璧なその美しい顔が鬼のような形相に変わるのを見て、絵麻は心の中でひいいと悲鳴を上げた。
振りほどこうにも、背後からがっちりと男の力で押さえつけてしまっているので、さすがの絵麻もどうしようもない。

そんな絵麻の気持ちなどお構いなしに、さらに純は絵麻の頬にも唇を落とす。

「もう、彼女なしで生きられないんだ。一生側にいてもらうつもり」
「！？」

女性に見せつけるように、絵麻の体に両腕を絡める。
また女性の顔が引きつった。
早く否定しなくてはと思うのだが、今迂闊にしゃべると相手を逆撫でしそうなので、絵麻は話すタイミングを計りかねていた。

「そんな地味な小娘のどこがいいのよ。貴方、いつもパーティーにはモデルの子ばかりで、そんな子連れてきたことないじゃない」
「確かに地味だしまだお子さまだけど、二人の時はすごくかわいいんだ。この子の前でだけ、本当の俺でいられる。うちの親父も公認だしね」

初対面の人間に対して、地味とは何だ。
というか、純も否定しないのか…！
平穏に生きたい自分でも、さすがに面と向かって地味だなんだの言われると傷つく。
さっきから純は普通に聞いたらノロケのような台詞を吐いているが、要は絵麻を一生専属にしてずっと働かせるということだ。
それは純の父親も望んでいるので“公認”、絵麻に対しては他の女の子と違って優しくしなくても気にならないので“本当の俺でいられる”、と。

かわいいの意味は分からないが、どうせ絵麻をからかった時の反応が面白いということなのだろう。
そう心の中で解説しながら、絵麻はそこでふと気が付く。
純の会社関係のパーティーに出ていたということは、絵麻が時間外の護衛をしている時にも会っているかもしれないということだ。
顔を覚えられてしまうと、今後純の護衛だけでなく他の顧客の時にも支障が出てくるかもしれない。
何より、絵麻自身に何かしらの報復がきたとしたら……。

（それは困る！おおいに困る！）

絵麻は、純の腕が緩んだ瞬間に体を反転し、彼の胸に顔をうずめた。
純も女性も自分を凝視していることは視線が痛いのでよく分かるが、もうこれ以上顔をさらすわけにはいかない。

「どうしたの。ん？」

純の問いかけにも、絵麻は顔を上げずに頭を横に振った。
絵麻の艶やかな肩までの黒髪が左右に揺れる。
ニットに顔を押しつけているので、まるでグリグリと純に頭突きをしているかのようだ。
声も出すわけにはいかないので、絵麻は純にだけ見えるように顔を少し上げて目を合わせる。

（早く、この場をどうにかして！関係者にバレたくないのよ！）

絵麻は必死に目で訴える。
必死過ぎて少し涙目になっていたかもしれない。
――しかし、残念ながらその仕草は端から見ると、単に上目遣いで彼氏に甘えているようにしか見えなかった。
それが相手の女性をさらに逆撫でするわけなのだが、今の絵麻にはそんなことに気付く余裕などかった。
純はそんな絵麻の様子を見て、絵麻の頭に手を置き子どもをあやすように撫でると、さらに反対の手を腰に回してぎゅっと抱き込む。
そして音を立てて今度はおでこにキスをすると、前を向いて口端を上げて女性に話しかけた。

「見ての通り、この子が俺の本命なの。そもそも君とは付き合ってるわけでもないし……第一、絶対に本気にならないって約束だったでしょ？」
「…っ！！」

女性は怒りで体を震わせると、何か言おうと口を開きかけたが、唇を噛みしめてそのまま駅へと向かっていった。
絵麻は背後で女性がハイヒールの音も荒々しく立ち去っていくのを感じると、ほっと肩の力を抜いた。
やはり女の嫉妬は怖い。
今は学校で純や琥狼と一切関わらないようにしているからいいが、そうでなかったら毎日こんな風になっていたのだろうか。
想像するだけで身震いがする。

「なに、寒いの？」
「！！」

純が顔を覗き込んでくる。
そこで絵麻は自分がまだ純に抱きすくめられていることに気付いた。
純の胸に置いている両手を突き出して体を離そうとしたが、逆にぎゅうぎゅうと抱きつかれる。

「ちょっ、離してよ！もうお芝居しなくていいでしょう！？」
「えーなんで？いいじゃん、昔はよく抱き合ったのにさ」
「それはあんたが毎回勝手に抱きついてきてただけでしょうが！」

絵麻が依頼主に手を上げられないのを知っていて、純はジタバタする絵麻の様子を面白そうに眺めていたが、さすがに駅前で人の目が多くなってきたので体を離す。
そこで純は、絵麻が握りしめているチラシに初めて気が付いた。

「あれ、今日は特売でもあるの？」
「あ！」

純の言葉で、絵麻は自分の今日一番大事な用事を思い出した。
予期せぬ出来事に巻き込まれたせいで、時間がギリギリになってしまったが、走ればまだ間に合うかもしれない。

「ちょっと！チラシに載ってたおしょうゆとお米売り切れてたら純のせいだからね！」
「あー分かった分かった、お詫びに一緒に買い物行ってあげるからさ」
「……とか言って、本当は会議とかサボりたいだけなんじゃないの」
「違うよ、ひどいなぁ。純粋にエマが心配なだけだよ」
「ほんと、あんた口だけはうまくなったわよね」

その後、おひとり様1点のみのしょうゆと米を純にも並ばせて買うことが出来た絵麻は、黒いＢＭＷに戦利品を積み込んで家まで送らせたのだった。

――――いつもは目立ちたくない彼女の、いつもとは違った放課後のひとコマ。

地味に生きたい、そんな彼女の事情ー1

「お帰りなさいませ。お嬢様」

広い敷地にどっしりと構えた豪邸。
3メートルもありそうな感情な鉄の門の向こうに、ずらりと黒服の男達が両脇に並ぶ。
絵麻はそんな非日常的な光景を前に、無言で立ちすくんでいた。

（……どうしてこんなことになったんだろう）

絵麻の心のつぶやきに答えてくれる者は、もちろんいない。
事の発端は、隣に堂々と立っている幼馴染なのだが…鷹村琥狼は何も言わずにそのまま歩き出した。
絵麻はその背中を見ながら小さくため息をつくと、琥狼の後を追いかける。
本当にどうしてこんな状況になったのか。
それは先週の木曜に遡る――――。

＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞

「えっ？今週の土曜？」

叔父・浩司の事務所に先月分のバイト代を取りに来た絵麻は、急な依頼に声を大きくした。

「しかも、琥狼から？」
「そう、あの琥狼からな。珍しくちゃんと事務所を通して話をしてきたぞ。いつもは学校外の仕事は、お前に直接聞いてきていただろう」

通常は必ず事務所を通して依頼をするものだが、純と同様、琥狼も幼馴染という気軽さからか絵麻の直接頼むことが多い。
その内容は個人的なものから前回の純のような面倒なものまで様々だが、浩司経由の依頼は規模が大きい正式な依頼がほとんどだ。
ということは、今回は琥狼の家——香港マフィア絡みの仕事ということか。
またややこしい事に巻き込まれそうな気はするが、大きな仕事であれば個人的な感情で断ることは出来ない。
浩司も琥狼の家と懇意ということを差し引いても、莫大な報酬と名声が得られる仕事であれば必ず引き受けるだろう。

「依頼の内容は？それって、やっぱり私指名なの？」
「残念ながらお前指名で、しかも一人だ。内容は、琥狼の身辺護衛だと聞いているが…詳細は直接お前に話すそうだ。どうせクラス一緒なんだし、明日でも聞いてみたらどうだ」
「ちょっと冗談やめてよ。学校で琥狼と話したら無駄に目立つじゃないの。そもそも、同じクラスだけどあんまり教室にいないし」

琥狼も同じクラスだが基本的には教室におらず、授業は出るが休憩時間はすぐに教室を出てしまう。
彼の周りには基本的に不良っぽい男子生徒が多い。
“類は友を呼ぶ”だろうか、琥狼に憧れて取り巻きになるのはほとんど男だ。
髪を派手に染めているわけでもなく、メガネをしていて制服も特に着崩しているわけでもない。
それなのに、その生まれつきの眼光の鋭さのせいか、醸し出すカタギでない迫力のあるオーラのせいか、琥狼は学校の裏番長のような存在だった。
とは言っても、むやみにケンカを売ることもしないし、寄ってきた男子生徒をアゴで使うことはない。
むしろ他校の生徒に絡まれていた男子生徒を助けて、兄貴と呼ばれるくらいだ。
学校内で琥狼の素性を知る者はほとんどいないが、カリスマ性は隠せないらしい。
ちなみに、女子にも人気があるのだが、琥狼がそっけないので遠巻きから眺めているのだとか。

「お前ら、相変わらず学校じゃよそよそしくしてるのか」
「そうよ、だって純も琥狼もそれぞれ目立つんだもの。近くにいる

だけで周りからヒンシュク買うに決まってる」
「難儀だなぁあいつらも。お前の前だと年相応のガキに見えて、まだ可愛げも出てくるんだが」
「幼馴染だから飾らなくて済むだけでしょ。そこらへんの女の子と違って気を遣わなくてもいいし、どうせ依頼主と護衛の関係っていうのもあるし」
「お前もドライだな。付き合いも長いんだ、もう少しあいつらに協力してやれよ」
「……とか言って、おじさんは仕事の依頼が欲しいだけのくせに」
「こら、おじさんって言うな。ここでは社長だ」

口を尖らせて言う絵麻に、浩司に軽く頭を小突く。
そして、浩司は机の引き出しを開けて、白い封筒を取り出した。
「とにかく、話は明日にでも琥狼に直接聞け。でもって、後で俺に報告しろな。ほら、この間の報酬だ」

浩司からお金の入った封筒を渡されると、絵麻は中身を確認して鞄にしまう。
とにかく今回の依頼は、琥狼本人から聞かなければならないようだ。
どうやって接触しようか…絵麻は明日のことを思うと憂鬱になった。

＞＞＞

次の日、絵麻は自分の席で本を読みながら難しい顔をしていた。
２時限目が終わってすぐに、数人の男子生徒を引き連れて琥狼は教室を出てしまっている。
琥狼がどこにいるが大体把握しているが、いつも友達に囲まれているのでうかつに近づけない。
今日中に聞いておかないと、もしかしたら明日明後日の急ぎの依頼かもしれないので、余計に焦る。
教室の端をちらりと見ると、純がいつもの通り男女のグループの中心で声を上げて笑っていた。
純は基本的に教室にいて、誰かと話をしたり遊んだりしていることが多い。
いない時は、どこかに呼び出されて告白されている場合がほとんどだ。

（どうしようかなぁ…）

絵麻が小さくため息をついていると、教室のドアから絵麻を呼ぶ声が聞こえる。
隣のクラスの秋良だ。
近くにいたクラスの女子数人が、秋良に気付いて頬を染める。
秋良は身長１７２センチ、スタイル抜群で性格もサバサバとしているため、かっこいいと女子からの人気が高い。
女子からの熱い視線に気づいた秋良は、控えめな笑顔でそれに応える。
さらに頬を赤くする女子達を横目に、絵麻は秋良に近付き、一緒に廊下まで出ると小声で尋ねた。

「珍しいわね、秋良がうちのクラスまで来るのって」
「いや、うっかり国語辞典を塾に忘れてきたんだ。ちょっと貸してくれないか」
「了解」

絵麻は自分のロッカーから国語辞典を取りに行く。
また廊下に出ると、秋良はすれ違いざまに声をかけてきた後輩の女子ににこやかにほほ笑み返していた。
絵麻は、ちょっと呆れた感じで秋良を見る。

「相変わらず女の子に人気よね。まるで王子様みたい」
「女の子はかわいいし、彼女たちの期待を裏切りたくないからね。まあ、絵麻の幼馴染たちに比べたらまだまだだけど」
「…あいつらの真似はしない方がいいと思う」
「ああそうだ、そういえば」

秋良は辞書を受け取りながら、絵麻の教室の中を見て言う。

「さっき、鷹村と廊下ですれ違ったぞ。珍しくひとりで歩いてたから、先生に呼び出されたんだと思ったんだが」
「えっ、ひとりで？」
「ああ、実験棟の方に行ってたな。5分くらい前」
「！」

これはチャンスかもしれない。
ひとりで行動して、しかも人気のない実験棟に向かっているなんて、仕事の話をするにふさわしいシチュエーションだ。
絵麻は秋良と別れると、残りの昼休みの時間を気にしながら実験棟へと小走りで向かった。

地味に生きたい、そんな彼女の事情ー2

実験棟は、その名の通り実験室が数多くある校舎である。
ついでに調理室や家庭科室も併設されているので、放課後にはクラブ活動の生徒で賑わう。
しかし、今は休み時間のため、移動教室で歩いている生徒もほとんどいない。

（実験棟といっても、結構広いからなぁ…）

絵麻はとりあえず心当たりのある教室をひとつひとつ見て回っていた。
おそらく琥狼は、カギのかかる教室でひとり昼寝でもしているのだろう。
何故か実験棟の各教室のカギを持っているかは不明だが、琥狼はひとりになりたいときは必ずここに来ている。

（……ん？）

絵麻が化学実験室の前に差し掛かると、準備室の方から何か物音が聞こえた気がした。
歩みを止めて耳を澄ますと、確かに人がいる気配がする。

この昼休みの時間に準備室にいる生徒はあまりいないので、先生が早めに授業の準備に来ているのだろうか。
一瞬琥狼かもしれないと思ったが、確かこの部屋のカギは琥狼は持っていなかったはず。
念のため確認しようと、絵麻が準備室のドアをそっと開ける。
案の定、ドアにカギはかかっておらず、奥の方に誰かがいる――――
しかも二人。

「……ねえ…もっと、こっちに来て……」

薄暗い部屋の奥から聞こえてくる女性の甘い声。
それに重なる衣擦れの音と、やけに近いかすかな2つの影。
これはまずい。
今、とてもまずい現場に来ている気がする。
何よりもこの準備室に流れている空気がアヤシイ。
絵麻はすぐに引き返そうかと思ったが、男の声が聞こえてきて思わず声を上げそうになった。

「…俺は教師に手を出す気はない」

琥狼だ――しかも相手は先生か！
立ち去るべきなのだろうが、でも元々の目的は琥狼と話をすることだ。
この機会を逃すと今日中に話をすることは難しいかもしれないが、かといって二人の逢引きが終わるまで待つわけにもいかない。
絵麻は心の中で葛藤している間も、どんどん二人の話は進んでいる

ようだ。

「あら、ここに来てくれたってことはそういうつもりじゃないのかしら？」

「あんたが、提出してない課題を持ってこいって言ったからだろう」

なるほど、琥狼が誘ったわけじゃないのか。

純は女性であれば誰の誘いでも乗るが、琥狼は絶対に素人には手を出さない。

クラスメイトはおろか、先生など決して眼中にないだろう。

しかし、先生にまで狙われるとは何というフェロモンだろうか、恐ろしい。

ドア付近の机の下に潜り込んだ絵麻は、とりあえずこの場が収まるまで待つことにした。

琥狼が乗り気でないのなら、そのうちどちらかが部屋を出て行くに違いない。

あちらの様子を伺うと、そろそろ話が終わりそうだ。

「このことを学校に言うつもりはない。だから、二度と俺を誘うのは止めてもらおうか」

「！！」

先生が悔しそうに息をのむ様子が分かる。

琥狼は相手がこれ以上食いついてこないと分かると、踵を返して準備室から出て行く。

絵麻は準備室に残っている先生に気付かれないよう、そっと琥狼の

後を追った。

>>>

「まあな」

琥狼の家は香港マフィアを家業としている。
組織の規律が厳しいがその分仲間のつながりが強く、特に裏切りへの報復は凄まじい。
だから、規律に違反することを琥狼はひどく嫌う――家業が家業なので、社会的な規律とは違ったものが多いが。
琥狼は父親が日本人であることと、小学生の時に抗争の多い香港から日本に避難して長いので、まだ日本の常識をよく分かっている。
といっても、空き部屋のカギを自由に使い、部屋を好きなようにカスタムしている時点で、学校の規律にはかなり反していると思うのだが、これもあまり突っ込まないことにする。
時計をチラリと見ると、昼休みの時間ももう残り少ない。
絵麻は本題に入ろうと、両腕を組んでソファに座っている琥狼に視線を戻した。

「浩司おじさんから、学校外の依頼があるって聞いたんだけど。直接話すって言うから、わざわざこんなところまで探しにきたんだからね」
「ああ、その件か」

琥狼が絵麻に目で座るように示してきたので、絵麻は琥狼の向かいのソファに座った。
メガネの傾きを直しながら、琥狼はソファに深々と座りその長い足を組む。

「今回の依頼は2週間。基本的に俺の側に付きっきりになる。もちろん、組織の会合の時も一緒、帰る家も一緒だ――久々に泊まり込みの依頼になるな。報酬はいつもの5倍は出す。かと言って、俺は今誰か

に命を狙われているわけではないから、そう構える必要はない。ただ、行動制限がかなりあって窮屈かもしれないが」

「……えええ！？」

普段口数の多い方ではない琥狼が一気に依頼内容を話し終えると、絵麻は頭の中で依頼内容を復唱してから声を上げた。

「2週間って長くない？しかも泊まりなの？琥狼の家に？というか、狙われてなくて何でそんなに一緒にいなきゃいけないの？」

「落ち着け」

琥狼は、思わず立ち上がりかけた絵麻を片手で制した。

今までも泊まりがけの依頼はあったが、こんな長期間はなかった。

家に帰れなかったら弟の夏音はずっとひとりで家にいることになるとか、学校に行く時は別々になるのかなど、絵麻の頭には依頼を受けた場合の色々な弊害が頭に浮かんできた。

琥狼はそんな絵麻の様子を見ながら、膝の上で両腕を組んで絵麻をまっすぐに見つめる。

メガネの奥の鋭い眼光を受けて、さすがの絵麻も少し怯む。

「な、何よ」

「お前、この間純の依頼受けたんだってな」
「…そうだけど」
「毎回、あいつに甘くし過ぎなんだ。誘拐の時もわざわざ自分で助けに行ったりして…いつもの事なんだから、純の身内に任せて放っておけばいい」

……何故、自分が怒られなければいけないのだろう。
琥狼だってよく学校外の依頼を振ってくるではないか。
確かに純は誘拐慣れしているし、今回のことは彼が仕組んだことで命を取られる話ではなかった。
しかし、純は琥狼の数少ない対等でいられる友人でもあるのに、その友人を助けた絵麻が責められるとは理不尽極まりない。
絵麻は文句を言おうと身を乗り出したが、ふとこの間の純の誘拐事件で琥狼にお礼を言っていなかったことを思い出した。

「あ、そうだあの時は連絡してくれてありがとう。よく私の言いたいこと分かったわね」
「付き合い長いからな。それに、単純なお前の考えていることくらいすぐ分かる」
「ちょっ、何よそれ！」
「言葉通りの意味だ」

口を尖らせる絵麻を見て、ふっと琥狼が微笑む。
純と違って、普段あまり感情を表に出さない琥狼に微笑みかけられると、レアなものを見たと心臓が一瞬跳ねる。
普段ぞんざいな扱いを受けているせいで、少しでも優しくされると動揺してしまうようだ。

絵麻は何だか気恥ずかしくなって目線を反らすと、話を元に戻す。

「とにかく、どうせこの依頼断れないんでしょう？浩司おじさんも絶対引き受けろって感じだったし」

「俺個人じゃなく“家”としての依頼だからな。いい加減諦めろ」

そう言うと、琥狼はペットボトルをまたひと口飲み、立ち上がって冷蔵庫に戻す。

そのままドアに向かうと、「そろそろ授業始まるぞ」とまだソファに座っている絵麻に向かって言った。

「俺からも浩司さんに話はしておく。夏音のことも心配するな。うちの人間を何人かつけておくから」

「……琥狼の家の人間……せめて厳つい大男にはしないであげて。逆に通報されるから」

その言葉に琥狼が口端を上げると、ちょうど昼休みが終わるチャイムが鳴り響く。

絵麻は次の授業に遅れないよう急いで教室へと走って行った。

———もちろん、琥狼とは別行動になるようにルートは変えて。

地味に生きたい、そんな彼女の事情ー２（後書き）

実は、第一話の琥狼の家事情を少し変えました（父親が日本人でした）

読み返していて違う設定にしていた自分にびっくりです…。

地味に生きたい、そんな彼女の事情ー3

そして週末。
朝から「今から迎えに行く」と琥狼からの一方的な電話を受けた絵麻は、とりあえず昨夜用意したお泊りセットを玄関に置いた。
夏音には戸締りをしっかりするようにと、何かあったら浩司を頼るように言っておいた。
本当は2週間の間は夏音を浩司の家に泊めさせてもらおうかと思ったが、夏音の中学校からかなり距離があるので、やはり家にいた方がいいと判断した。
琥狼が組織の人間を護衛につけてくれたので、滅多なことはきっと起きないだろう。
ちなみに気を遣ってくれたのだろうか、絵麻達とそう年の変わらない普通の少年を寄越してくれた。
絵麻も夏音も何回か面識のある少年なので、安心して任せられる。

「じゃあ行ってくるね」

玄関の外で車が止まる音を聞いて、絵麻は夏音に声を掛けて家を出た。

そして———この話の冒頭に戻る。

「お帰りなさいませ。お嬢様」

絵麻は、巨大な門が開く音を遠くに聞きながら立ち尽くしていた。
肩まで切りそろえられた髪は、艶やかな腰までのまっすぐな黒髪に。
いつもはジーパンとパーカー姿の私服は、清楚な淡いピンクのＡラインワンピースに。
靴はもちろんスニーカーではなく、ワンピースの色に合わせたピンクのパンプスに。
すべて、車に乗せられてからここに来るまでに買い与えられたものだ。
さらにエステにも行って体を磨かれ、ヘアメイクに化粧も施されて、絵麻はすっかりお嬢様に仕上がっていた。
普段の彼女を知っている人間なら、絶対に気付けないくらいの変身っぷりだ。

「なかなか似合うじゃないか、お嬢様」

今から数時間前。
誰でも知っている有名なブランド店で、琥狼の変身を遂げた絵麻を見た第一声がそれだった。
口端を上げて満足そうな表情を見せる幼馴染に、絵麻はキッと睨みつけながらドスドスと近寄った。
琥狼は背が１８０ｃｍ以上あるので、１６０ｃｍに満たない絵麻にとってはかなり見上げることになる。

「おい、そんな歩き方をしたら、せっかく着飾ったものが台無しになるぞ」
「ちょっと、これ依頼とどういう関係があるの？護衛するのにこんなに着飾らなくちゃいけないわけ？」
「必要だから」

それだけ言うと琥狼は絵麻の右手を掴み、店の外に出る。
絵麻は急に掴まれたことに驚き、そしてその後は琥狼の大きな手につながれているのが恥ずかしくなり、振りほどこうとした。
が、車に乗り込んでもその手は離れることなく、ずっとつながれたままだった。

「ねえ、手、離してよ」
「駄目だ」
「…何で」

琥狼は窓枠に肘を付きながら、目線だけを絵麻に寄越してひと言言い放った。

「お前は今日から、俺の妹だから」

＞＞＞

「……昔から思ってたんだけど、琥狼って肝心なことを必要な時に言わないわよね」
「そうか？」

豪邸の前で黒服の厳つい大男たちに歓迎を受けた絵麻は、両脇に並ぶ人間アーチを通り玄関にたどり着くまでにかなり精神力を消耗していた。
今は絵麻に用意された一室で、ソファに座り慣れない靴を脱いだ足をブラブラさせている。
このまるで洋館のような豪邸は琥狼の日本での自宅である。
どうやら今回の仕事は、“琥狼の妹”として、この豪邸に2週間生活して護衛するということらしい。

「先に言ってくれればこちらも心の準備とか出来たのに」
「最初に言っていたらお前、依頼断っただろう」
「…」

さすが幼馴染、絵麻がこういう大人しい格好をする依頼を嫌がるのをよく知っている。
女の子としてかわいく着飾るのは楽しいのだが、護衛をする時は逆に動きにくくなるので避けている。
万が一、それでミスでもしたら元も子もない。
だから絵麻は護衛の際に大人しくしていないといけない服装や役柄の場合は、難色を示してしまう。

海外の依頼主だと絵麻に着物を着せたがる場合が多く、パーティーで無駄に声をかけられて本来の仕事に集中出来ないこともあった。
それに比べれば、このワンピース姿はまだましな方だろう。
今回の琥狼の妹というのは父親違いで、生まれつき病弱で療養していたため公表されていなかった設定となっている。
年齢は１３歳で、激しい人見知りをするためいつも兄の側にいないと倒れてしまう。
そして、琥狼と一緒にいる時は常に彼と手をつないだり、腕を組んでいたりしなければならないらしい。
……どこまで病弱すぎる設定なのだろうか。
ちなみに、琥狼の家は女系家族で、父親よりも母親の方が強い。
日本人である父親は婿養子で、組織をとりまとめているのは母親だ。
姉が３人いるが、どれも個性的で強い女性達ばかりだったため、その中でやっと生まれた長男は本当にとても可愛がられていた。
本当なら姉３人の誰かがこの組織を継ぐはずなのだが、３人ともこぞって後継者を琥狼にと推してきたという。
琥狼自身にも組織を束ねるだけの類まれなるカリスマ性があったため、周囲の反対もなく後継者におさまったとのことだ。
だから純の時のような後継者反対派による内部分裂もないはずだが…今回は何故こんな小芝居を入れた護衛が必要なのだろうか。

「ねえ、琥狼」
「……」
「？　ねえ、琥狼ってば」
「……」
「ちょっと、聞いてるの？」

絵麻がソファで寛いでいる間、背を向けて机で勝手にパソコンを操

作していた琥狼だが、呼ばれてもチラリとこちらを見てまた画面に視線を戻してしまう。

「琥狼？何で無視するのよ」
「お兄様」
「は？」

琥狼は、今度は体ごと絵麻に向き直って告げた。

「妹なんだから、“お兄様”だろう？」
「！！」

絵麻は目が零れ落ちんばかりに見開いて琥狼を見るが、驚きのあまり声が出ない。
琥狼は椅子から立ち上がりゆっくりとソファに近付くと、身をかがめて絵麻と目線の高さを合わせる。
そして絵麻の耳元に顔を寄せ、低く落ち着いた声で囁いた。

「ほら」
「……」
「言えよ、“お兄様”って」
「……！」

完全に遊ばれている。

その証拠に、囁く声は絵麻が羞恥心を感じるようにわざと甘くしているし、琥狼は“お兄様”と呼ばれて喜ぶ趣味もないのでふざけているのが丸分かりだ。
とにかく彼は絵麻をからかいたくて仕方ないのだ。
昔から琥狼は常に冷静で、子供の無邪気さからほど遠い少年だったが、絵麻には出会った時に大ゲンカをしたため遠慮がない。
同年代の友達と遊ぶ機会がほとんどなかった琥狼にとって、友達とケンカすることは衝撃的だったらしい。
それからは、少年時代に誰もが経験するようないたずらを絵麻に仕掛けることで、喜怒哀楽の表情を出すようになった。
それでも普通の子供に比べたら乏しかったが、琥狼の周りの大人たちは大層喜んでいた。
絵麻からすれば、何もしていないのに会うたびにちょっかいをかけられていい迷惑だ。
愛想のかけらもない琥狼にカチンときて、「自分の考えくらい口で言え」「嬉しいなら顔に出すくらいしろ」等と思ったことを言っただけのことが、こんなにも絵麻の平穏な人生を乱すことになるとは思わなかった。
その後純と出会った時のこともあり、さすがの絵麻も自分が喧嘩っ早いのではないかと悩んだものだ。
今は、温厚なはずの絵麻ですらケンカしてしまうほど彼らが問題児だったということで、自己完結しているのだが。

「おっと」

琥狼はさっと身を引いて、絵麻が蹴りだした右足を避けた。
長年の付き合いで、琥狼は絵麻が何かあると足技を繰り出すことをよく知っている。

どこまでからかうと怒るのか、どこまでなら冗談で許されるのか、きちんと引き際をわきまえているのだ。

「お前はすぐに足を出す癖を直せ。明日から2週間はお嬢様の生活だぞ」
「…分かってるわよ」
「本当に分かってるか？」
「依頼はきちんとこなしますから」

そう言ってそっぽを向く絵麻の頭を慰めるように撫でて、琥狼は「もう遅いから寝ろ」と言いドアへと向かった。

「それとも一緒に寝るか？」
「絶対にお断り！！」

琥狼はドアを開けたところで余計なひと言を言うと、絵麻が投げたクッションが当たる前にうまくドアを閉める。
絵麻は投げた姿勢のまましばらく止まっていたが、部屋が夜の静けさに戻ると、どっと疲れが出てソファに倒れこんだ。
これから2週間、毎日こんな風におちょくられるのだろうか――――
そう思うと、琥狼の側にいなくていい学校に早く行きたいと心から願うばかりだった。

地味に生きたい、そんな彼女の事情１４

ある平日の夜、都内の喧騒から離れたホテルの一室でひとつの会合が行われようとしていた。
そこには大勢のスーツ姿の人間が集まっていた。
まだ幼さの残る若者から貫録のある初老の男性、または穏やかな中年の女性まで年齢層は様々だった。
皆、日本語ではない言語で会話をしながら、会合が始まるのを待っている。
時計の針が２０時を回ったところで、奥のドアが開く音が響いた。
その途端に、話し声が一斉におさまる。
そのドアからは数人のスーツの男性を連れた少年が入ってきたが、すでに纏う空気は１０代のものではない。
しんと静まり返った部屋に、少年の落ち着いた、それでいて力強い声が響く。

「今日はよく集まってくれた。急な呼び出しとなってしまったことは申し訳なく思うが、是非皆に伝えたいことが集まってもらった」

琥狼は大勢の前で、前を見据えながら堂々と話し続ける。

「皆には今まで話さずにいたが、私には血を分けた妹がいる。異父妹でありずっと日本で暮らしてきたが、李一族の娘であることには

変わりない。今後は彼女を組織に迎え入れるつもりだ」

事前に周知させていたのか、思ったよりもどよめきは少ない。
その様子を確認して、琥狼はさらに続けた。

「今日は彼女を皆に披露しよう――――美姫」
「はい。お兄様」

琥狼の呼びかけに、ひとりの少女が柱の影から姿を現す。
少女は、漆黒の長い髪をたなびかせ、おずおずと兄の側に近付く。
そして琥狼が差し出した手に自分の手をのせ、その手に導かれるように大勢の人間の前に立った。
顔は少し俯き加減で、長いまつ毛にに縁どられた目は伏せられたままである。

「お初にお目にかかります…李美姫と申します」

か細いが鈴のように響く声が、その愛らしい唇から紡がれる。
まるで天女のような美しさと儚さを持った少女の出現に、周囲は釘付けになった。

「今宵は皆様にお会いできて心から嬉しく思います。今後はお顔を合わせることも多いかと思いますが、よろしくお願いいたしますね」

最後の言葉に合わせて、美姫は伏せていた目をおもむろに上げ周囲を見渡すと、小首を傾げて控えめに微笑んだ。
艶やかな黒髪がさらりと肩から流れ落ちる。
その瞬間、部屋中に息を飲む音が各人から聞こえた。
そして、この日のお披露目はたった数分で成功を収めたのである。

＞＞＞

もちろん、窓はフルスモークだ。
いかにもアレな感じの車に乗り込んだが最後、絵麻ではなく“美姫”としての時間が始まる。

（あの服着たら、自然と大人しくなっちゃうのよね…服はかわいいんだけど、私じゃ似合わないと思うんだけどな）

絵麻は周りに誰もいないことを確認してから、駆け足で門を出て車に向かう。
自動でドアが開いて絵麻が車に乗り込むと、そこにはここ数日着なれたかわいらしいブラウスとスカートが置かれていた。
今日はフリルがふんだんに付いた白いブラウスと、ベージュのフレアスカート。
車内は大人三人が横になれるくらいに広く、運転席との間には仕切りで見えないようになっている。
絵麻は慣れた手つきで着替えると、運転席にいる男性に声をかけた。

「林さん、今日は琥狼は一緒じゃないの？」
「ええ、寄る所があるとのことで、先程お送りしてきましたよ」

林と呼ばれた男性は運転しながら絵麻の問いかけに答える。
彼は琥狼が日本に来た時からずっと運転手を務めているので、絵麻もよく知っている人物だ。
もう３０歳は過ぎているだろうか、昔から落ち着いた雰囲気を醸し出していて、まさに大人の男という感じだった。
グレーのスーツを着こなし、エリートサラリーマンと言っても十分

通用するのに、これがマフィアの一員とは何とも不思議だ。
ちなみに、彼のフルネームは林正道といい、香港出身だが幼少の時から日本に住んでいるらしい。

「絵麻様――いえ、美姫様の今日のスケジュールですが、特に顔を出さなければならない会合もありませんので、このまま屋敷にお戻りいただいて結構ですよ」
「本当？よかったぁ、毎日毎日あんな愛想笑いしていたら顔の筋肉がおかしくなるわ」

絵麻は、大きく息を吐きながら革張りのシートの背にもたれかかった。
車の中ではお嬢様を演じなくていいし、林は昔からの付き合いで慣れているので、今のうちに思う存分寛いでおくことにする。
そんな絵麻の様子をバックミラーから見て、林はくすりと笑った。

「美姫様は、どんなお顔でも十分可愛らしいですよ」

さらりといつもの調子で言われ、絵麻は顔を赤らめて言葉に詰まる。
琥狼の声もバリトンの響く低音ボイスだが、林の声はさらに大人の落ち着きがプラスされていて、今みたいな女の子扱いされる言葉を言われるとどうも落ち着かなくなる。
どうやら絵麻は低い声に弱いらしい。
気恥ずかしさのあまり腰まである長い髪をいじりながら、絵麻は別の話題に変えた。

「そういえば、林さんはどうして今回“琥狼の妹”が必要なのか知っている？」
「美姫様がご存知以上のことは、私にも分かりかねますが」
「私も詳しくは知らされていないの。とにかく琥狼の側で護衛することだけで」

“琥狼の側で護衛するために、不自然にならないよう妹に扮する”と、いう
たった二週間の護衛ならわざわざことあるごとに各所妹として紹介する必要などない。
しかもまるで兄バカのようにベタベタと人前で甘やかす。
琥狼の幼馴染の自分でさえ、そのらしくない態度に訝しむのだから、彼の部下はもっと困惑しているだろう。

「林さんだっておかしいと思わないの？あの琥狼が人前でああいう態度をとるなんて…いつも組織の人間の前では身内同士でも一線引いて他人みたいな態度なのに」
「そうですね、琥狼様は自分にも他人にも厳しい方ですから。しかし、美姫様がお相手であればそういうこともあると思いますよ。まさに“目に入れても痛くないほどかわいい”という日本の言葉の通りですね」
「妹相手なのに？」
「それだけ美姫様が特別ということなのでしょう。琥狼様は、一度懐に入れた相手にはとことん甘いですから」
林のその発言に絵麻は頭をひねった。

琥狼は来るものは拒まずだが、基本的に人や物に執着しない性質なので、絵麻は何かを追い求める彼を見たことがない。
絵麻が知っているんは、いつもすました顔で自分をからかう姿くらいだ。
同じく純もよくからかわれたりしているので、これは気を許した幼馴染だからということなのだろう。

「うーん、でもねぇ……」

依頼を受けてから1週間、その間も詳しい話を聞こうとするのだが、琥狼は「別に深い意味はない」とそれ以上は何も言わない。
絵麻が勘ぐりすぎているのかもしれないが、会合での組織の人間達の視線が気になるし、その中には明らかに値踏みをするものもあるので周囲の様子がおかしいのは確かだ。
それが急な“妹”の出現への戸惑いなのか、それともそれが不都合な人間がいるのか。
明日明後日は確か琥狼も夜は自宅に早く帰るはず――。
護衛期間も折り返し地点にきたし、そろそろはっきりと問い詰めてみようか。
絵麻は心の中で頷き、久々の貴重な夜の時間に何の勉強をしようか計画を練ることにした。

地味に生きたい、そんな彼女の事情ー5

久々に、学校から真っ直ぐに家に帰ることが出来たその日。
林が夕食を勧めるのをやんわりと断り、厨房に行ってサンドイッチの軽食を用意してもらった。
琥狼の自宅といっても、大勢の組織の人間も住み込んでいるので、専属の調理人たちが常時就いている。
彼らは突然の本家の娘の出現に最初は戸惑っていたが、絵麻が病弱な大人しい少女と知ると、庇護欲がわいたのか積極的に世話を焼いてくれるようになった。
琥狼とは小学生からの付き合いなので、林と同様に使用人も何人か昔からの顔見知りがいる。
しかし、今回は変装していることやここ数年は家を訪ねることもなかったので、ごく一部の人間しか絵麻の正体が分かっていないようだ。

（バレてないってことはうまく変装出来ているってことなんだろうけど…）

悪い意味ではないにしろ、多くの人を騙していることに心が痛む。
しかも、まだこの依頼内容の意図が分かっていないのだ。
納得いかなかったり理解できなかったりする依頼は基本受けないが、依頼主である琥狼のことだ、裏があるに決まっているが絵麻が本当に嫌がることはしないはず。たぶん。
とにかく、琥狼に問い質すのは会えた時にして、今はせっかくの自

由時間を有効に使おう。
絵麻は今までの遅れを取り戻すかのように、一心不乱に机に向かった。
毎日宿題や予習は何とかこなしていたが、自分の日課にしていた問題集のペースが乱れてしまっていた。
昼休みに図書室で秋良と一緒に勉強することもあったが、やはり集中して出来るのは家だろう。
絵麻は決して勉強漬けの毎日を送りたいわけではない。
が、自分が一度ペースを乱すと怠けグセがつくタイプと分かってるので、なるべく甘やかさないようにしている。
まさに、他人に優しく自分に厳しい典型的なタイプだ。
そんな彼女が集中して3時間が経過した。
ふと壁の時計を見ると、もう23時だ。
そろそろ寝る時間だが、明日の数学の授業で確実に当てられるので、これから予習をしておかなければいけない。
しかし、久々に猛烈に集中して勉強したせいで、気が緩むと眠気が襲ってきた。

（ちょっと……ちょっとだけ、休憩…）

絵麻はふらふらと立ち上がると、すぐ側にあるベットにダイブする。
そういえば“美姫”の服装――ワンピースと長い髪のカツラを付けたままだった。
化粧もしているし、高い借り物の服もシワになってしまうし、とにかく一度着替えなければ…。
そう思うものの、上質のシルクのシーツで覆われたベットは今の疲れた体に心地よく、このまま寝てしまいそうだ。
枕に顔を押し当てて絵麻はジレンマに呻いていると、ドアをノック

する音が聞こえてきた。
絵麻が答える前にためらわれることなくドアが開く。
そんな無遠慮なことをするのは、この屋敷にひとりしかいない。

「何だ、もう寝ているのか」
「……そう思うなら放っておいてよ」

琥狼は勝手に部屋に入ってくると、ベットにうつぶせになったままの絵麻に近寄り、身をかがめた。

「そもそも、こんな時間に女の子の部屋に無断で入るなんて、マナー違反じゃないの？」
“妹”に会うのに遠慮してどうする」
「親しき仲にも礼儀ありでしょ、“お兄様”」

絵麻がわざと嫌味ったらしく“お兄様”を強調するのも気にせずに、琥狼はベットに腰を下ろした。
ふかふかのダブルベットが沈んで、一緒に絵麻の体も揺れる。
琥狼は四方に散らばる黒い髪をひと房手に取ると、「昔みたいだな」とつぶやいた。
そう、小学生の時の絵麻は、今の”美姫“のように髪を長く伸ばしていつも下ろしていた。
中学生になって家事をやる時に邪魔になると思い、現在のように肩の上の長さでいつも切るようになったのだ。
“美姫”の清楚なお嬢様姿は普段の絵麻からはかけ離れたものだが、琥狼から見れば昔の絵麻の重なる部分があるのだろうか。

琥狼はベットに腰かけたまま、まだ長い髪を見つめながら手で触り心地を確かめている。
基本的によくしゃべる人間ではないので、しばらく二人の間に沈黙が続いた。
絵麻は何の用事で部屋に来たのかを聞こうと思ったが、眠気が手伝っていることもあり、突っ込みもせずそのまま黙って目を閉じていた。
昔から琥狼と一緒にいる時は、こんな感じだ。
二人とも沈黙が続いても、別々のことをしていてもあまり気にならない。
元々親同士が知り合いだったこともあり、家族ぐるみで会っても「ちょっと待っていてね」と子供だけ部屋に残されることがよくあった。
しかし二人が一緒の遊びをすることは少なく、琥狼は本を読み、絵麻は絵を描く。
言うなれば、野生の猛獣と草食動物がお互いテリトリー内に居ながらも、敵ではないと判断して素知らぬフリをしているようなものだ。
気に入らなければ黙って部屋を出るだろうから、琥狼も一応気を許してくれていたのだと思う。
まあそれも小さい頃の話で、今は学校でしか顔を合わさないし話をしても依頼の内容くらいだから、今の琥狼が絵麻をどう思っているのかは分からないが。

「絵麻」
「……だから、なに…？」

浅い眠りに入っていたので、何だかたどたどしいしゃべり方になっ

てしまったが、ちゃんと返事してやっただけましだろう。
琥狼は相変わらず艶やかな黒髪を手でいじっている。
そしてそっと目を閉じると、おもむろに口元に寄せてそれに唇を落とした。
絵麻は相変わらずうつぶせたままなので、琥狼の様子には気付いていない。
が、髪の毛をいじられていることは分かるようだ。

「ちょっと、髪の毛引っ張らないで。それカツラだけど、引っ張られると頭が引きつるんだから」

絵麻がそう言うと、琥狼は髪から手を離したが、今度はゆっくりと絵麻の上に覆いかぶさる。
琥狼の大きな体が照明の光を遮り、絵麻に大きな影を落とした。
絵麻が頭だけを動かして後ろを振り向くと、自分の体を両腕で挟み上から見下ろしてくる琥狼の目と合う。
そのあまりの近さに、絵麻は一気に眠気が吹き飛んだ。

「……な、何？」
「お前、最近変わったことはないか」
「変わったこと…？」

絵麻は急な質問に眉を顰める。

「どういうこと？」

「俺の近くにいて、誰かの強い視線を感じたり、不審な動きをしたりする奴はいるか」

絵麻はここ1週間の“美姫”の生活を思い返してみる。
ニコニコ愛想を振りまきながらたくさんの人間に挨拶はしたが、どれも隣に立つ琥狼に恐れをなして批判をするものはおろか、非難の目を向ける者はいなかった。
それに、不慣れな格好をしていても絵麻も仕事だ。怪しい素振りを見せる人間はすべてチェックしている。
あえて言うなら、琥狼のパートナーを狙っていた何人かの女性の目が痛かったこと位だろうか。
琥狼が妹の腰を抱いたり、頭を撫でたりと無駄にスキンシップが多いせいで。
病弱な妹相手なのに何故嫉妬の対象になるのか、絵麻にはさっぱりだ。
普段の琥狼があまりにも淡泊だから、その豹変ぶりに驚いているのかもしれない。
絵麻でさえ「お前は純か！」と何度か叫びそうになったが、理性を総動員して押さえた。
今回の依頼は本当に神経を使う。

「特にないわ、今のところ」
「そうか」

琥狼はそう言うと、そのまま絵麻の隣に倒れこんだ。
ベットが大きく揺れて、驚きのあまり絵麻は上半身を勢いよく起こす。

それと反対に琥狼は右腕を頭の下に置いて、絵麻に背を向ける形で横になった。

「…琥狼、なんでそこで横になるの」
「眠いから」
「それなら自分の部屋で寝ればいいでしょう！？　年頃の妹と一緒に寝ようとする兄はいないわよ！」
「本当の妹がいないからよく分からない」
「じゃあ、年頃の仮にも女の子のベットに無断で寝るのは問題なんですけど！」
「これも依頼の一環だ。お前、依頼主の指示に従わないつもりか？」

琥狼は頭だけを動かし絵麻を睨みつける。
最後の一行のセリフは明らかにドスをきかせていた。
人に命令することに慣れている口調。実際にほとんどの人間がこの声に圧倒されるだろう。
しかし、絵麻にそれは効かない。
だが本当に琥狼は疲れているようで、声の調子も体全体も気怠い雰囲気が出ている。
琥狼は学校に行ったあと、毎日色々な集まりに顔を出していた。
ここ1週間ほぼ毎日同席している絵麻でも、かなりキツイ仕事だとすでに体感している。

絵麻は短く息を吐いて、ベットから降りた。
おかげさまで眠気も醒めたし、さっさと明日の予習を終わらせてしまおう。
机に座って後ろを見ると、琥狼はさっきと同じ体勢のまま動いていない。

耳を澄ますとかすかに寝息が聞こえてくる。

（本当にこの部屋で寝るつもりなのね…どういう神経してるんだか）

何をそんなに神経質になっているのか、メガネは外さなくていいのか等色々思うところはあるが、絵麻は先ほどの集中力を戻して明日の自分のために黙々と予習に取り掛かった。

地味に生きたい、そんな彼女の事情ー６

琥狼の“妹”になりすまして１０日目。
何事もなくこのまま依頼が終わるかと思ったが、やはり事件は起こってしまった。

＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞

「もう無理！顔が引きつる！！」

放課後、林が運転する車に乗ってとあるパーティー会場から帰る途中、絵麻は思わず叫んだ。
連日色々な会合やパーティーでお披露目をさせられ、絵麻はかなり疲れていた。
学校が終わってから夜遅くまでおしとやかに微笑み続け、琥狼の自宅に戻っても宿題を終わらせるのに精いっぱいの毎日。
今日もどこぞのお偉いさんに挨拶をして、顔が引きつりそうだった。
それに加えて最近は、時折刺さるような視線が混じる。
気付いているのは絵麻だけのようだが、その視線の方向に目をやっても誰かは分からない。
最初は琥狼の隣にいる絵麻に嫉妬する女性達かと思ったが、どうやらそれだけではないらしい。
本当はすぐに追いかけて正体を突き止めたいが、“美姫”である以

上、人前で動くことが出来なかった。
琥狼にそれとなく告げてみても、「どうせ俺に対する値踏みの視線だろう。いつものことだ」と、特に気にする様子はない。
何だかすっきりとしない気持ちで、とりあえず依頼をこなしているが…。
そんな絵麻に、林は運転しながら穏やかな声で話しかける。

「美姫様、明日もいつもの時間にお迎えに上がりますので」
「明日はどこに行くの？」
「日頃懇意にしている製薬会社へのご挨拶です。先に先方入りしている琥狼様と合流し、それから夕食会となります」
「……じゃあまた家に帰るのは深夜前ね」
「申し訳ありません」

べつに林さんが謝ることじゃないわよ、と言うと、絵麻はもう大分慣れたカツラの毛先をいじりながら、窓に体を預けた。
対向車線のテールランプをぼんやりと見ながら軽くため息をつくと、林がバックミラーをちらりと見て、さらに言葉を続ける。

「しかし、あと数日で今回のお仕事も終わりですね。またお会い出来る機会が少なくなると思うと、寂しい限りですが」
「…林さん、本当にさらりとそういう事言うわよね」
「もちろん本心ですので。琥狼様も、今回美姫様と一緒に居られることがとても嬉しかったようですよ」
「ストレス発散でからかう相手が近くにいて嬉しいだけでしょ…」

絵麻のベットで勝手に琥狼が寝ていた先日、その後遅くまで机に向かっていた絵麻がうたた寝をして目を覚ますと、そこはベットの上だった。
きちんと布団も被っており、カツラも外されていることまでは問題なかった――さらにワンピースが椅子に引っかけられて、自分の体に琥狼の腕が絡まっていなければ。
眠い目をこすりながら顔を動かして、端正な寝顔を間近で見た時は息が止まった。
飛び上がろうにも、長い手に腰をガッチリと回されていてベットから出ることも出来ない。
布団をめくって自分の体を急いで確認してみたが、ワンピースは脱がされているものの、その下に着ていた長いキャミソールはそのままだったのでそこはひと安心した。
ちなみに、琥狼はメガネを外して眠っていたらしく、絵麻のワンピースと一緒に椅子の上に置いてあった。
その後は眠り続ける琥狼の頭を叩き、低血圧で寝起きの悪い幼馴染に説教を食らわせた。
絵麻の大声を聞いて慌てて駆け付けた林に、仲介に入ってもらったのはまだ記憶に新しいことだ。

「あんな生活、毎日だったら身が持たないわよ」
「私としては年相応でかわいらしい琥狼様が見られるので、楽しいですけどね」

そう笑いながら言う林をジロリと睨んで、絵麻はまた窓の外に視線をうつした。
明日の仕事が終われば残りの日程はほぼ外出がないという。

（とにかく、明日一日を乗り切ろう。もう十日以上“美姫”をこなしているんだもの、あと数日くらい余裕だわ！）

＞＞＞

純も学習しているのだろう。
純としては、話しかけただけで絵麻から絶交されたら、気の許せる幼馴染と優秀なボディガードを両方失うのという死活問題になる。今は誰も周りにいないようだが、基本的に学校で純達と接触するのは避けたい。

「何か用なの？」
「用がないと声かけちゃダメ？俺はただ、エマと久しぶりにお話ししたかっただけだよ」
「学校じゃダメって言ってるでしょうが」
「えー相変わらず冷たいなぁ」

口を尖らして拗ねる姿は、他の女子から見たらかわいいと抱きしめたくなる類のものだったが、絵麻はそのうさんくささに顔を顰めた。そんな絵麻の表情を見て純は嬉しそうに笑うと、また一歩絵麻に近付く。

「今、琥狼の仕事引き受けてるんだって？」
「え」

絵麻は純のひと言に、文字通り固まった。
今、こいつは何と言った？

「しかも、琥狼ん家に泊まり込みらしいね？」
「何でそれを知って…」

いつもだったらうまく取り繕うのに、不意打ちの質問に絵麻は声が上擦ってしまった。
これでは純にその通りとバラしているようなものではないか。
小首を傾げて尋ねるその笑顔に何か怖いものを感じて、絵麻は思わず一歩後ろに下がった。
依頼の内容は守秘義務で、たとえ身内でも話しはしない。
どんなに純と琥狼が仲が良くても、おそらく二人の間で話すようなことはしないだろう。
それなのに知っているということは…。

「もちろん琥狼からは聞いてないよ。俺の情報網から……ここ数週間、琥狼は自分の身内の会合だけでなく、普段あまり行きたがらなかった余所のパーティーにも顔を出してる。必ず、自分の“妹”を連れてね」

ドキッ。
絵麻は、自分の心臓が跳ね上がる音が大音量で聞こえた。
純も琥狼も同業者でないとはいえ、お互い家業が経済界に深く関わっているため、かなり色い情報網を持っている。
琥狼の家の本業はマフィアだが、表では東洋医学を基調としたエステや化粧品、漢方等の美容関係の会社を経営している。
世界中のセレブな女性から支持され、社長である琥狼の母親は女性経営者として有名だった。
もちろん、裏の世界でも女系一族でマフィアを牛耳る女頭領としても有名だが。

さらに、純は絵麻との距離を縮めて、息がかかるくらい顔を近く寄せた。
琥狼まで高くないとはいえ純も１７０ｃｍ後半はあるので、絵麻は首をかなり上に傾けなければならない。
純はその色素の薄い茶色の目を煌めかせながら、しかめっ面をしている絵麻の目を面白そうに覗き込んできた。。
相変わらず女の子受けするきれいな顔が、今は悪魔の微笑みに見える。

「その“妹”は、おしとやかで長い黒髪が似合う美少女ってことで、今その筋の人間達の間ですごくウワサになってるよ…そう、長さは違うけどこんな感じのキレイな黒髪らしくて」

絵麻は思わず視線を落として、何とか誤魔化そうと口を開く。

「へ、へえ、そうなんだ。琥狼にそんなかわいい妹がいるなんて、知らなかったわ」
「だよねぇ、俺も初耳だったよ。だから、一回見に行っちゃった」
「！」

絵麻が顔を勢いよく上げると、目の前には無駄に笑顔で、面白がるような目をした純の顔があった。

「招待されたパーティーじゃなかったからバレないように遠くから見たけど、すごくかわいい子だった。緊張してるのかずっと伏し目

がちだったけど、その清楚な感じがたまんなかったな。琥狼もずっと妹の側にいるし、腰に手を回すわ蕩けるような甘い目で妹を眺めてるわで、見てるこっちが恥ずかしくなるくらい」
「……」
「琥狼もあんな顔出来るんだねぇ。そんなに“美姫”ちゃんは大事なのかな……エマはどう思う？」
「へっ！？」

話を振られて、絵麻はまた上擦った声を上げてしまった。
“美姫”のことを言われているが、元は自分なのだ。
ここは適当に相槌を打てば乗り切れるはず…と思いながらここ連日の琥狼のベタ甘な態度を思い出し、いい返しがとっさに出てこない。
そして、純は顔を絵麻の耳元に近付けるように、甘えるような声で囁く。

「俺の時はかわいい格好してくれなかったのに、琥狼のお願いは聞くんだ？」

———完璧にバレている。
というか、元から分かっているならこんな回りくどい聞き方しなくてもいいじゃないの！
まだ学校内ということもあり、絵麻は大声を出せない代わりに、強く唇を噛んだ。
でも、もうバレているのなら仕方ない。
逆に純なら何か知っていることや思い当たることがあるかもしれないので、思い切って聞いてみよう。

「…純は急に琥狼が“妹”を紹介してきたこと、何か知ってるの？」
「さあ？琥狼が婚約者を連れてくるっていうなら分かるけど、“実は妹がいました”って言ってもあいつの家には影響ないしね。ほら、俺のトコと違って組織の団結力すごいから」

この間まで、純は父親の会社を継ぐにあたって障害となる後継者反対派をあぶり出していた。
その時、学校外依頼で絵麻が護衛を引き受けたのだが、結果として絵麻がいいように使われたことがまだ記憶に新しい。

ピピピピピピ。

純のケータイの着信音が鳴り響いた。
純はポケットに入っていたケータイを取り出して画面を確認すると、メールの返信を打ってまたポケットに戻す。

「俺、そろそろ仕事あるから行くよ」
「……別に元々引き留めてないけど」
「あ、そうだ」

純は校舎に戻る途中に立ち止まり、絵麻の方に向き直る。

「知ってた？琥狼の家って、異母兄弟でも結婚出来るらしいよ」

――その時の純の笑顔が本当に悪魔のようだったと、後日絵麻はそうぼやいたと言う。

地味に生きたい、そんな彼女の事情－７（前書き）

ごぶさたしております。
ここ数か月、とにかくあっという間に過ぎ去りました。
またぼちぼち更新させていただきますので、お付き合いくださると幸いです。

地味に生きたい、そんな彼女の事情－7

「お待ちください、美姫様！」
「いいからここで降ろして」

オフィス街の立ち並ぶ路地で、絵麻は迎えの黒塗りの車からまさに飛び出そうとしていた。
スピードの出ている車のドアを開けようとする絵麻を見て、運転していた林はやむを得ず車を止める。
車が停車するやいなや、絵麻はドアを開けて急ぎ足である建物に向かった。
その後姿を林の声が追う。

「美姫様！」
「琥狼、ここにいるんでしょう。直接話するから」
「時間は必ずお作りします。ですから、どうか今は怒りをお鎮めください！」

絵麻は林の諌める声を無視して、全面ガラス張りの高級ホテルへと進む。
先程、琥狼の秘書からこっそり聞き出したところ、今はこのホテルで行われている取引先企業を集めたパーティーに出席しているらしい。

珍しく絵麻を連れて行かなかったので、久々に勉強時間が出来たと喜んでいたのに、この展開だ。
今日、学校で純にあんなこと―――異母兄妹でも結婚出来るなんてことを聞かなければ、こんなに憤ることもなく、数日で円満に任務完了だったのに。

（今回の依頼の本当の意味が、やっと分かった）

護衛なんかじゃない。
これは、体のいい身代わりだ―――しかも、一回きりでは終わらない類の。

（ちょっと、私に内緒で何してくれようとしてんのよ！）

絵麻は、　もはや自分が今“美姫”であることも頭から吹っ飛んでいた。
オフィスビルの照明を受けて輝く黒髪に、すれ違う通行人が皆振り返る。
黒塗りの高級車から突然飛び出してきた儚い様子の美少女は、今や阿修羅のごとく怒りを漲らせていた。
絵麻がホテルの自動ドアを抜けると、フロントマンが声をかけてきたが、キッとひと睨みしてそのままエレベーターに向かう。
その気迫に怯んだフロントマンに、後から追いかけてきた林が声を掛けてその場を収めているようだが、そんなことは今はどうでもいい。
目的地は５２階、ＶＩＰが使用する３００人は入るパーティー会場

だ。
エレベーターが到着すると、絵麻は迷うことなく大きな扉に向かう。
扉の前に居る数人のガードマン達が絵麻に気付き、やんわりと静止しようとするが、それも無視して扉に手を掛けた。

>>>

全身から迸る激情に、鋭く前を見据える瞳。
そこに儚げな少女の様子は一切見当たらない。
人々が圧倒されて息を飲む中、少女は一歩足を踏み出した。
漆黒の長い髪が目の前でたなびく様子を目で追いつつ、人々は無意識に道を開ける。
彼女の目的はただ一つ――――敬愛する兄だ。

「ごきげんよう。琥狼お兄様」

絵麻は琥狼の前で立ち止まると、にこりと微笑んだ。
今までと同じ柔らかい微笑みにも関わらず、凄まじい気迫を感じる。
そんな少女の様子を、琥狼は銀縁のフレームの奥の鋭い目を細めて眺めていた。

「今日も皆様と会食とお聞きしました。いつもでしたら私も連れて行ってくださるのに、今日はお留守番だなんてひどいですわ、お兄様。……それとも、何かご一緒出来ない理由でもおありなのかしら？」
「いや、連日外出ばかりではお前も疲れるだろうと思ってな。ただでさえ、体が万全ではないんだ。無理はさせたくない」

琥狼の大きな手が絵麻の右頬を撫でる。
はたから見れば、妹、もとい将来の伴侶を気遣っている甘い様子に、何人かの女性客が頬を染めた。
もちろん、それと反した鋭い視線もあったが。

「まあ、お兄様をそんなに煩わせていたなんて…私、一族の人間として失格ですわね。このままでは、皆様に認めていただくのも難しいかと」
「これから一族の生活に慣れていけばいい。俺が側についているのだから、何も心配する必要はない」
「でも、四六時中お兄様に付き添っていただくわけにもまいりません。やはり、私が表に出るのはまだ早かったのでは…」
「お前はこの李一族の末姫だ。そしてゆくゆくは、俺の片腕として一族を盛り立てていくという役目がある。早くに皆に披露するにこしたことはない」
「でも」
「一族の意思だ。お前は一生、俺の側に居て俺だけを見ていればいい」
「お兄様…」

自分を必要と訴える兄の言葉に、絵麻は潤んだ目で上目遣いに見上げる。
見つめ合う兄妹はすでに二人の世界を作っており、周りの人間は誰も口を挟むことが出来ない。
むしろ、普段笑うことの少ない琥狼が、和らいだ表情で口端を上げていること自体が異常なのだ。
琥狼の側近でさえも、固唾を飲んで見守っている。
しかし、絵麻の心の中は怒りのあまり燃え上がっていた。
（人が一生懸命妹役を降りようとしているのに、何ふざけたこと抜かしてるのよ！）
潤んだ目は怒りのあまり涙目になっただけで、上目遣いは単に睨み

つけているだけだ。
絵麻は、喜怒哀楽どの感情でも極まると涙が出る。
ここで、美姫が表舞台に出ないように仕向けないと、今後も“琥狼の妹”として依頼がたくさん舞い込んできてしまう。
下手をすると、毎回護衛ではなく恋人だったり妻だったりイチャイチャしなくてはいけないかもしれない。
それは阻止しないと、絵麻は一生この仕事を続けていく羽目になる――堅実で安定した生活が一気に失われてしまうのだ。
必死になって目で訴えているのに、琥狼は目を細めたまま絵麻を見つめるだけだ。
明らかに今の状態を面白がっている。
付き合いの長い絵麻には、琥狼のほぼ無表情な顔からでも考えていることが分かってしまう。
パーティー会場に突撃した時は一瞬素を出してしまったかもしれないが、今は“美姫”としての態度をなるべく崩さないように気を付けて、さらに琥狼に言い募ろうとしたその時。

ふっと空気が変わった。
周りの人々はまだ気付いていないが、絵麻にはそれが分かった。
左右の後ろから二人、明らかな害意を持ってゆっくりと自分に近付いて来ている。
こんな公衆の面前での犯行に及ぶなんて、ただの脅しか見せしめか――。
この時の絵麻は、琥狼への怒りも相まって、自分が今美姫として振る舞わなくてはいけないことが一瞬頭から吹き飛んでしまっていた。
ターゲットまであと一歩という距離まで近づくと、男達は一気に行動に移した。
一見パーティー客に扮した男達は、態度を豹変させて絵麻に掴みか

かる。
しかし、絵麻は左右から繰り出される拳を、身を軽く引いて避けた。
男達はターゲットに簡単に避けられたことに驚きながらも、体勢を立て直して勢いよく絵麻に手を伸ばす。
その拳も顔を傾けることで難なくかわすと、絵麻は顔の真横にある男の腕を掴みねじり上げた。
さらに、もう一人の男が繰り出してきた足を左手で受け流し、足払いをかける。
片足立ちで足払いをかけられた男はバランスを崩して倒れこんだところを、起き上がれないよう男の頭を足で押さえつけた。

辺りがしんと静まる。
ほんの5秒程の出来事だった。
パーティー客もガードマン達も誰も反応出来ず、ただ絵麻が男二人を瞬殺する様子を見ていることしか出来なかった。
いや、反応出来なかったという方が正しい。
か弱いはずの少女が屈強な男二人を伸してしまったという事実を受け止めきれていなかったのだ。
絵麻は、先程までの気迫を一切かき消し、ここ数日で身につけた“美姫”らしいたおやかな仕草で口元を押さえた。

「あらまあ、どうしましょう。急に近づいてくるものだから、びっくりしてしまいました」

その言葉に人々は我に返り、数人のガードマン達が慌てて不審者達を会場の外へと連行していった。
今目の前で見たものが信じられないと、人々のは一斉にざわめき、それがなかなか収まらない。

絵麻は、まるで何事もなかったかのように大人しく琥狼の側に寄りそう。
琥狼といえば、この一連の騒動の中で全く動じず、腕を組んだままずっと身じろぎすらしなかった。
そして今は――おそらく絵麻や身近な人間しか分からないだろうが――ひどく満足そうな表情で会場の様子を眺めていたのだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0136w/

シークレットサービス

2011年12月24日03時52分発行